
マクロスF Formula

漆黒龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マクロスF Formula

【コード】

N3400R

【作者名】

漆黒龍

【あらすじ】

いつか願った世界から世界への旅。実現したはいいがココは何処だよ……。

目覚めた世界は（前書き）

やっちまったよ。

まあいいか。

息抜き作品……でもないが、楽しんで頂ければ幸いです。

では、どうぞ。

目覚めた世界は

広大な漆黒の海に輝く無数の星。

ココは地球から、太陽系から遙か遠く。

太陽系とは違う星系が連なる場所。

漂う一機のMS、その中で彼は目覚めた。

- - - - -

世界は美しい。

今まさにそう感じる。

漆黒の宇宙に浮かぶ、地球を思わせる青い海の星、

火星のような赤い灼熱の星、土星のような輪が二つ付いた不思議な
緑の星。

翔る彗星、流れ星。

視界いっぱい映る、光る無限の星々。

銀河の渦。

此処は何処だろうか。

なぜ、俺はこんな所にいるのだろうか。

腕を動かしてみる。

視界に映るのは何処かで見たとある白亜の装甲に覆われた腕、

黒い手、マニピュレーター。
視線を左に移す。

左肩には白亜の装甲に深紅の色で91の文字。右肩には同じくFの文字。

さらに視線を動かす。

青い体、腰辺りから下は腕と同じく白亜の装甲、赤いつま先。

まるで……、これではまるで、

ガンダム じゃないか。

電撃が走り、ぼやけていた感覚と頭が急激にクリアーになる。

慌てふためきパニックになるかと思いきや、彼は至極冷静だった。
分かる。

というか、忘れかけていたモノを思い出す。

それはコイツの動かし方。

……一先ず同調解除。^{リンク}

一瞬の暗転、瞬きにも満たない時間で視界にはコックピットが映る。
すぐさまコックピットハッチオープン、生身のまま外に出る。

久々のこの感覚。

そのまま少し漂い、宇宙を感じる。

寒い、けど……久々の宇宙は変わらず綺麗で、静かだった。

そして、今まで乗り込んでいたガンダムを見る。

白色の二対の角、ツインアイ、ガンダム特有の顔、スマートなボディ、肩アーマーのF91の文字。

細部が若干違うが間違い無い、ガンダムF91だ。

見間違っ訳が無い、俺の愛機……一番好きなガンダムだ。

だが何故だろう、ココに居ることとコイツに乗っていることに疑問を一切感じない。

不思議だ……。

と、ココで失敗に気づく。

ノーマルスーツもバックパックも無しに宇宙に出たもんだからF9
1に戻れない。

困った。

生身AMBA Cで頑張るか？

向こうから来てくれれば助かるのだが……。

と思うとF91のツインアイが青く光り、背部のメインスラスタ
ーから青い粒子を音も無く放ち、
手の届くところまでやって来た。

「マジか……」

宇宙空間で声を出せたのも聞こえたのもビックリだが、思っただけ
で動くのは衝撃だった。

そして疑問が生まれた。

スラスターから出た青い粒子のことだ。

そう思うや否や、再び乗り込み機体データを出す。

疑い半分だったが、やはり念じれば反応してくれた。

空中に数十個のデータが出てくる。

「動力は…… G・DRIVE ?GNドライブじゃなくて?それ
に永久機関だつて!?

じゃあさっきの青い粒子は…… 粒子?特性は……ミノフスキー粒
子とほぼ同じか。

なら、このF91の特性は?

……冗談だろ、フル・サイコフレームだつて!?

それになんだこの装甲強度は!超合金Zじゃあるまいし……。

武装は……ん?ブレードファンネル?凄いな……ビームサーベルを
ファンネルにしたのか。

んでバイオコンピューターに、バイオセンサーもか。
……出力、センサー、変換効率……デタラメだ、それに……極めつ
けはコレか……」

次々とガンダムに対して念じ、現れるモニターを見ていく。
モニターに出る数値はどれもこれもデタラメな数値、凄まじいの一
言。

そして最後に出た《UG細胞》の文字。
その意味は……

「完璧なメンテナンスフリー機ってことか」

損傷しても自動修復しさらに強固な物へと改修、エネルギーも自動
回復。

理解した、外見こそガンダムF91だが中身は全くの別物。

「理解したはいいが……これからどうするかな。
位置を見る限り太陽系はどこだよ、って感じだしな……」

うーん、と唸っていると何かの声と意思が頭を駆ける。

「なんだ、今の……歌？」

それに叫びと願いのようなのが走った？

……この星の裏側……あつちか」

木星っぽい目の前にあるデカイ星、今いる位置から丁度反対側で何
か感じる。

ダイレクト・リンク。モーションも完璧、各機能オールグリーン。
一瞬の暗転、視点がF91のモノになる。

「F91、発進」

F91はメインスラスタから青い粒子が噴出し、凄まじいスピードで宇宙を駆けていった。

.....

僅か30秒で意思の固まった所に到着、戦闘の光りが見えた。

「光りが見えた！

え？あれは……マクロス？」

全貌が見える位置で停止。

先ほどの声を頼りに来てみれば見えたのは戦闘の光りと、巨大なドーム状の大型都市船に、

それに連なる形で数十個の長方形の環境艦が連結している巨大な宇宙船。

その周りには護衛の戦艦が陣取っている。

「間違い無い、マクロスに出てくる超長距離移民船団の船だ。

だが……知らない、もしかしてマクロスFか？

ちい！よりもよって見てないヤツか……」

7までしか見てないからな……、こんな事態になるんだったら見ておくべきだった。

と後悔しても時既に遅し。

だが、黙って見過ごす訳にもいかない。

それに、このガンダムだったら……バルキリーの機動に余裕で着いていける。

「三機の小隊が何かに追われている……？」

狙えるか？いや、当ててみせる。このガンダムなら！！」

人の気配、それも尋常じゃない位に焦りと恐怖を感じる。

その後方、三人を追う複数の生物から弱いが意思のようなモノを感じる。

ビームライフルを構える。

少し間を空け、そこから銃身を僅かに下にずらし、トリガー。

独特の発射音と共に、青いビームが発射される。

一つ。

すぐさま小隊の元へと向かいながら再び構え、今度は右に少しずつしトリガー。

二つ。

そのまま左へずらし、三発目。

三つ。

ざらつく感覚が走る。

あの虫の残留思念か？だが、なんだ？怒りに似たような感じが……。

そう思いながらも一旦考えるのを止め、周りに気を張らせながら小隊に並び通信を繋ぐ。

「その新統合軍のナイトメア、聞こえるか？

こちらガンダムF91、無事か！？」

「き、聞こえる！！貴官か？さっきのビームは！？」

聞こえてきたのは自分とそう年は変わらないであろう若い男の声。震える声から焦りと恐怖、安堵が渦巻いているのがよく分かる。

「そつだ、俺が狙撃した。」

いいか、お前達は下がれ。ココは引き継ぐ。そんな状態じゃまともに操縦すらできんぞ」

「りよ、了解。感謝する!!」

「ありがとうございます!!」

「助かりました!!」

隊長機に続き、後続の二機からも声。

同じく男が一人、もう一人は女性、これも若い。

後退を促すと涙声で即答。

すぐさま反転し、母艦がいるであろう方向へと後退していった。

新兵……それも実戦経験ゼロの。

いや、今はそんなことより……この虫みたいな奴らをどうにかしたいとな。

一瞬だけ青い光りが身を包む。

サイコフレームを通して感覚が広がる。

「そんなに数は多くない、この程度なら……」

ビームライフルを再び虫に向け一発、僅かに遅らせ二発目。

一発目のビームを虫は高速で回避、しかし二発目が回避した場所で命中。

それを確認することも無く既に二匹目、三匹目と仕留めてすぐ。二機の見たことのないバルキリーが目止まる。

「あの二機、相当の腕前だな。

それに……追加装備が付いているな」

と、見ていて白い方が狙われているのに気がつく。だが傍から見れば……

「無防備すぎる！」

その言葉と同時に、ビームが虫に命中。爆散する。それに気づいたのか、白いバルキリーが寄って来る。

「すまない、助かった。礼を言う」

「いえ、何せ丁度良的だったんでね」

「ハハハッ！そりゃそうか、あんな所で棒立ちだもんな。

……SMS所属ヘンリー・ギリアム大尉だ」

モニター越だが、ギリアムが敬礼したのでこちらも名乗りながら敬礼で返す。

「俺はゼノン・グレイブ……所属と階級は無い、コイツはガンダムF91」

「なんだ？傭兵かなんかか？」

「まあそんなもんだ」

「なるほど、しかし始めて見る機体だな」

「ワンオフってヤツさ」

「へえ、つとー!」

虫の発射した赤いビームが通り過ぎる。

悠長に話していたので案の定、狙われた。

続けて砲撃が迫る。

即座に回避、二機で虫に向かう。

「戦場なのに悠長に話し過ぎたみたいだな!」

「そのように、援護する」

「了解!」

ギリウム機は弾幕を高速で避けながら虫へ突撃。

F91はその場から上昇しながら虫へ向け三発。

同時にヴェスバーをそのまま後方に発射し、迫っていた虫二匹に命中させる。

「オオオオツ!」

ギリウムが吼える。

高速で接近しながらミサイルで撃ち漏らした虫をガウォークに変形し、

ガンポットで撃破、即座にファイターに戻り縦横無尽に宇宙を駆ける。

「凄いな、あのガンダムって機体。変形機構も無いのにバルキリーの機動に余裕で付いていつてる。」

「それにあの射撃の正確さ、恐れ入るね。負けていられねえなあ!！」

「バトロイドに変形、無数の虫をロックオンしミサイルを一斉発射。」

「ギリウム!！」

「オズマ隊長!！」

「全弾命中を確認すると、離れていた別の重装備の灰色のバルキリーがギリウム機の並ぶ。」

「あの白いのは!?!？」

「味方です。あの機体はガンダムと言っらしいです、先ほど助けて貰いました。」

「あと乗っているのは傭兵らしいです」

「その白い機体の戦闘を見て、オズマは思わず声を漏らす。」

「………凄まじいな」

「ええ、射撃の正確さは正に百発百中って感じですね」

「ここで二人の目に映ったのは青く光る剣で虫、バジユラを斬り裂く姿。」

「なっ!?!？」

「光りの剣！？ビームサーベル！？」

「…………何者なんだ、一体…………」

爆発音が響く。

それで二人は我に返り、戦闘を再び開始した。

……

戦闘が始まってからどれほど経っただろうか。

確実に数は減っているものの、減っている気がしない。

虫っぽい外見の所為もあるのだろう、どうしても数が無限に湧いて
いるようにしか感じない。

「クソツ、抜けられた！！」

ギリアムは思わず叫ぶ。

撃ち漏らした大型が二体、中心都市への侵入を許してしまう。

「やらせねえぞ！！」

即座にバトロイドからファイターに変形、

大気圏内ではデットウェイトになるスーパーパックをパージし、空
いた穴より都市に入る。

少し離れた所で、ゼノンに人々の意思が走る。

「何？抜けられたのかッ!？」

大型を真つ二つにし、都市の方を向く。

そこへ灰色の重装備のバルキリーが並ぶ。

「S・M・S所属オズマ・リーよりゼノン・グレイブへ。応答され
たし」

「こちらゼノン・グレイブ、何か」

モニターに映るゼノンの姿を見て、オズマは疑問を持つ。

「（若い、それにパイロットスーツ無し？）

俺はギリアムの上官だ、先ほどはギリアムを助けてくれたそうだな。
感謝する」

「当然だ、それよりギリアムさん一人で都市に入っていったのを感じた。
援護に向かいたい」

「なにッ？抜けられたのか!？」

了解した、ココは引き継ぐから頼む!！」

「了解」

そう言うや否や、二機はそれぞれの戦場に向かった。

「ん？アイツ……なんて言った？感じたといったのか？」

オズマはそう疑問に思っても、赤い軌跡を残して迫るバジュラを前に

そんな意識は薄れていった。

.....

都市船の中に入り、マクロスの広さを改めて実感する。

「やっぱり思った以上にデカイし広いな……」

その建物の中に見慣れた物もあるのに気づく。

渋谷の109、どこかで見たような中華街、アメリカを思わせる町並み、

オーストラリアのオペラ・ハウスそっくりの建物などなど。

「凄い……」。

「ギリアムさん？」

観賞に浸っている場合ではなかった。

ゼノンはギリアムの極度の焦りを感じた。

「取り付かれたのか!？」

場所は……あつちか!!」

最大加速、すぐに目視。

そこには大型に機体が捕まり、もがいている姿が目映る。近くに人の反応。

男の荒い息遣い、女二人の恐怖の感情が走る。

「逃げ遅れたのがある!？」

先に救出しようか一瞬迷うも再び視線を戻すと、このままではやられると判断したのか、

ギリアムはコックピットから出て銃を乱射している。

「ッ!？それは無謀過ぎる!?!」

ゼノンは思わず叫ぶ。

ビームライフルを構えようとするがある事を思い出し、ビームサーベルを手にする。

宇宙船中でビームは駄目だ、接近戦でカタを付ける。

そして大型は銃を乱射しているギリアムをその手で掴む。

「まずい!間に合えッ!」

ライフルを誰もいないであろう所に放り投げ一気に近づく。

大型は気づくもこのF91のスピードの前では、もう遅い。

ギリアムを掴んでいる腕を斬り落とし、空いている方の手でキャッチ。

間髪入れずそのまま返す刃で高速で横一闪。

再びざらつく感情が頭を駆ける。

先ほども思ったのだが、この虫はほぼ同じ感情だった。

思考をしないのか?それともそういう生物なんだようか……いや、でも感情はちゃんとある……。

「またこの感じ……?」

けど、今は!?!」

すぐさまギリアムを拘束している手を剥がし安否を確認するため、コックピットから降り、ギリアムの元へと向かう。

「ギリアムさん！無事ですか！？」

「う……あ、ゼノ、ンか。ハハ……また、助けられちまったな」

両腕は在らぬ方向に曲がり、口から少量の血を垂らしながらも息絶え絶えでゼノンに語りかける。

「そう、ですね……。」

（両腕の骨が完全に折れている、足は……一様無事だが激痛で立てるかだろうか。）

おい、その三人！！安全な所まで行くからコッチに来い！！」

「あ、ああ……」

ギリアムと似たようなパワードスーツのような物を着ている男一人、緑の髪の小柄の女の子、ブロンドの美人が寄って来る。さつき感じた三人か。

「ギリアムさん、S・M・Sの場所は何処です？」

「データを……渡す、すまん……少し眠る」

データチップらしき物を受け取るとギリアムは激痛故に意識を手放す。

とは言っても、このデータチップは俺の機体には合わないのだったのか。

「君、S・M・Sっていう所の場所を知っているか？」

「あ、ああ分かるぞ」

「そうか、案内を頼む、F91の掌に乗ってくれ。君達も」

「……はい」

「え、ええ」

F91に念じ、右掌をを降ろさせる。

そこにギリアムを青年と共にゆっくりと乗せ、

他の者も全員乗ったのを確認するとコックピットに再び乗り込む。

同調^{リンク}し、F91を立たせS・M・Sに向かおうとしたその時、
自分に向けての明らかな敵意を感じた。

「上かッ!？」

右掌に乗っている四人に被害が出ぬよう優しく指を閉じて包むと同時に、

左腕のビームシールドを即座に展開し迫っていた攻撃を難なく防ぐ。
攻撃の元を見ると大型が迫るのが見える。

「ビームライフルを取りに行っていたんじゃない……」

横目でチラリと道路の上に横たわっているビームライフルを見る。
というか、そもそもビームは使えない。

接近戦はもつと駄目だ、四人に負荷が掛かり過ぎる。
なら……

青い粒子が一瞬輝く。

「ブレードファンネルッ！」

腰よりビームサーベルが二基飛び出し、不規則な機動で大型に高速で迫る。

大型はファンネルを落とそうとするもその機動に付いていけず、戸惑っている。

隙を見せた大型を上と下から貫く。

そのまま髪入れず回転させ、大型を縦に真っ二つにする。

「す、すげえ……」

指の間から戦闘を見ていた青年は、その凄まじさに思わず声に出してしまった。

「他は……いないか、よし。」

君、S・M・Sまでの案内を頼む」

ブレードファンネルを腰部に戻し、周りに気配を感じないことを確認すると、

掌でコチラを見ている青年に声を掛ける。

「ああ、S・M・Sはココからそう遠くは無い、この方向に行ってくれ」

と青年は北西の方角を指差す。

「わかった、しっかり掴まっていてくれ」

ゼノンは、F91を北西の方角に向かわせた。

この出会いが重大な出会いであると知らずに。

目覚めた世界は（後書き）

最後まで読んでもらって感謝。

とは言え、メインは取りあえず魔神皇帝の方なんでコツチは不定期です。

今まで以上に。

まあ、生暖かい目で見守って下さい。

機体設定(前書き)

とりあえず、F91の設定です。

8 / 1 1

少し改訂。

機体設定

GUNDAM F91【Formula 91】

頭頂高 15.2m

全備重量 10.5t

出力 不明

推力 不明

ジェネレーター G-DRIVE

見た目は角が白色になり、
両肩にクロスボーンと同型のビームガン（サーベル）マウント増設、
右腕にブランド・マーカーを設置した以外通常のF91と変わらず。

特殊標準装備・武装

ジー・ドライブ オメガ【G-DRIVE】

本機の根幹を成す動力機関。

莫大なエネルギーと 粒子と呼ばれる特殊粒子を生み出す永久機関
である。

G-DRIVEから放たれる 粒子は濃い青色であり、発射するビ

ームも同じく濃い青色である。

粒子は機体の推進力や姿勢制御に使われ、周囲に散布する事によって電波通信やレーザー機器を妨害する効果を発揮し、

圧縮して射出する事でビーム兵器として火器にも転用できる。

GN粒子ほどの万能性は無い。TRANS-AMシステムも無い。しかし、人々に想いを伝えるという点に関してはコチラの方が上。

ヴエスバー V・S・B・R【Variable Speed Beam Rifle】

可変速ビームライフル。

特徴はその名の通り発射するビームの収束率の調節と、射出速度の調節が出来ることである。

どちらとも連続帯域での調整が可能である。

例えを上げると、対象物の耐久力や距離に応じて高速で貫通力の高いビームから、

低速で威力を重視したビームまでを状況に応じて撃ち分けることができ、

それ故に通常の攻撃では貫通・突破不可能だったシールドを容易く貫通することが可能。

なお、デフォルトで大方のモノは簡単に貫通可能である。

本機のV・S・B・Rはチャージショットも可能である。

メイザー・ヴァイブレーション・ダガー MVD【Maser Vibration Dagger】

刀身を超高周波振動させ対象を切断する、小型の实体剣。

クロスボーンガンダムと同じく左右脚部の足の裏、土踏まずに各1本ずつ合計2本が装備されている。

主に奇襲攻撃用武装である。高速で射出する事もできる。

刃の部分だけ足の裏から出した状態で、敵を蹴りつけるようにして

攻撃する事も可能。

形状的にはハンドガード付きのダガーナイフに似る。

ブレードファンネル【Blade Funnel】

その名の通り、ビームサーベルのファンネル。

従来のファンネルのような射撃攻撃によるオールレンジ攻撃ではなく、

ビームサーベルによる近接攻撃でのオールレンジ攻撃を目的とし、

「防ぎよしの無い剣戟」をコンセプトに開発された武装。

操作方法はいままで通り、サイコミュによる無線誘導である。

なお操作には本武装の特性故、通常のファンネル操作以上に高い空間認識能力が必要である。

大気圏内でも使用は可能。

外見は普通のビームサーベルと変わらず、

ファンネルとしてではなく通常運用も可能である。

なお、本機に搭載されているビームサーベル×6は全てこの仕様である。

【

極秘密武装。

切り札。

追加特殊機能、その他

全身のフレームをフル・サイコフレーム化。

フレーム発光色は青。

動力の変更。

それに伴う各出力上昇。

剛性強化。

エネルギー変換効率の上昇。

各種センサーの変更、強化。

バイオコンピュータの他、バイオセンサーの搭載。

ミノフスキー・ドライブユニットの搭載。

ビームサーベルのビームガンバー化。

ビームシールド発生器の片方(右)をブランド・マーカに変更、強化。

操縦方法を、

MTS【モビルトレースシステム】

DFS【ダイレクトフィードバックシステム】

DML【ダイレクトモーションリンク】を掛け合わせた改良型に変更。

コックピット内部はMTSと似ている360 全天周囲モニター。

機体の状況がそのまま操縦者に影響する。

文字通り、機体と一体になり、感覚も共有する。

浮いていれば体は浮き、地面に脚が着いていれば操縦者も立つことになる。

脳波のみでコントロールも可能である。

コックピットから降りていても脳波のみで簡単な操作は可能である。

リミッター解除によってMEPE【Metal Peel-off effect】

による副作用効果で作り出される質量を持った残像とは別に、

フルドライブ次に法則を無視した圧倒的な速度による本物の残像を作り出ることができる。

フルドライブ次にはユニコーンガンダム程ではないが、各装甲が展開する。

UG細胞による完璧なメンテナンスフリー化。

武装

頭部バルカン砲×2

胸部メガマシンキャノン×2

肩部ビームガン（サーベル）×2

ヴェスバー×2

背部。

ビームシールド×2

両腕に各一個。右側はブランド・マーカ―。

予備ビームシールド×1

腰のビームランチャーマウントの下。

メーザー・ヴァイブレーション・ダガー

MVD×2

左右の脚部の土踏まず部分に各一個。

ビームサーベル×4

左右の腰に2個づつ。

ビームライフル×1

手持ち。腰にマウント可能。

ビームランチャー×1
腰のマウント。

機体設定（後書き）

物語の進行具合によっては書き足したりするかもしれない。

人物設定（前書き）

機体に引き続き、主人公の設定です。

8 / 1 1

書き足し、改訂。

人物設定

偽名

ゼノン・グレイブ

本名

性別

男

年齢

19歳(?)

身長

181cm

体重

76kg

銀髪のオールバック

黒目

説明・特殊能力等。

本作の主人公。孤児。

どっか別の世界行きたい、と取りあえず願ったはいいが、何の予告も確認も無く世界から世界への旅に出ってしまった奴（二度目）。

純粹な日本人だが何故か銀髪。

性格は自分自身は普通だと思っているが、周りからの評価は変わった奴で通っている。

名前は本名ではなく、ゲーム等で使っていた名前を取りあえず名乗っている。

日本人なので勿論漢字で、苗字が二文字、名前一文字である。

だが、特に隠す気はないので聞かれれば答えるつもりでいる。

一番上に着る服の腕を必ず七部辺りまで捲くる癖がある。

故に半袖は絶対に着ない。夏でもYシャツを着用し、袖を捲っている。

実は二度目の世界移動。

一度目はU・Cの一年戦争が始まる十年前に移動している。

そこから地球連邦軍に入隊し戦闘機のパイロットとして腕を磨き、

紆余曲折が多々あり、RX78-1のパイロットに任命される。

そして運命の年U・C・0079、サイド7にて最終演習中の所をジオンのMSザクの強襲を受け、

成り行きでRX78-2のパイロットとなったアムロ・レイと共に撃破。

以降は後に伝説のNT部隊と呼ばれるホワイトベース隊と行動を共にする。

そして白き流星のアムロ・レイと並び、ジオンからは黒き刃として恐れられる。

そして一年戦争を終結させ、グリプス戦役、第一次、第二次ネオ・ジオン戦争を戦い抜く。

アクシズ落下の際、アムロの想いを受けた人々を信じ、一時パイロットを引退する。

しかし未だに争いを止めない人々に人の心の光りを思い出させようと決意しパイロットに復帰。

だが、人々は止まらなかつた。

La+戦役、マフティの動乱、オールズ・モビルズ戦役、コスモ・バビロニア建国戦争、

木星戦役、神の雷計画、ザンスカール戦争。

後世に伝えられる大きな戦争の殆どに参加し、戦い抜いている。

ザンスカール戦争が終わってから、やっと地球は一時的に平穏を取り戻し、

部屋へ戻り、意識を落としたら元の世界の自身が消えた年数、時間に何故か戻っていた。

そこから五年、平穏な時を過ごすも再び世界への移動をしてしまい、現在に至っている。

身体能力はガンダムファイターにも引けを取らない程。射撃より格闘を好む。

ファンネル等の無線誘導兵器をピンポイント狙撃、斬りを可能とするほどNTとしての力も高い。

純粋なパイロットの腕だけ見てもアムロと並ぶ超一流の腕を持っている。

射撃ではアムロ、格闘ではゼノンが勝っている。

それ以外はほぼ拮抗している。

不老不死

世界移動の際に発現したモノ、というより奥底に眠っていた彼の本質が能力化したモノ。

服装

黒地に細めの青、白の縦のストライプが入ったYシャツ

白無地Tシャツ

右手首に黒のリストバンド

黒のカーゴパンツ

タクティカルブーツ（ブーツインはしない）

持ち物

愛用G-SHOCK

青い宝石の付いた指輪

F91のビームサーベルを人間が扱えるサイズにした物（ライトセーバーな感じ）

人物設定（後書き）

これも進行具合によっては書き足すかもしれない。

S・M・S（前書き）

第二話です。

後書きにちょっとした質問があるので、よければ答えて下さい。

S・M・S

S・M・Sの文字が書いてある建物が見えた辺りで、
ガウオーク形態の灰色の重装備バルキリーが上空から接近して来る。

「ゼノン・グレイブ聞こえるな？」

そっちじゃなく横に見える昇降機を使ってマクロス・クォーターに
来てくれ」

「オズマさんですか！？ギリウムさんが重症を負いました。急ぎ医
療施設に行かないと危険です。」

あと逃げ遅れた民間人三名を保護しました」

「なんだと！？ギリウムが？」

わかった、クォーターの医療スタッフを昇降機前に待機させとくよ
うに言っておく」

「お願いします」

オズマ機の先導によって昇降機であつという間にマクロス・クォー
ターに到着する。

とは言つても、目に映つたは普通の格納庫なのだが。

F91の片膝を着き、ギリウムさん含む四人を降ろす。

それを確認するや否や待機していた医療スタッフがギリウムを運ん
でいく。

同時にS・M・Sの隊員が先ほど保護した三人を誘導しようとする
のだが、何やら騒がしい。

金髪の美人に人が群がっているように見えるな。

とここで別の方向から大声が響く。

「ランカ！無事か！？」

「え？お兄ちゃん！？」

緑髪の小柄な子にオズマさんが声を掛けているのを横目に見ながら、F91を空いているスペースに立たせ、コックピットから出る。

「へえ……オズマさんとあの子は兄妹なんだ。面白い偶然だな」

そう呟やいているとコチラに気づいたのが、助けた三人が寄って来る。

「助かったわ、お礼に今度私のライブにタダで入れてあげる。じゃね」

「あ、ああ……」

金髪美人はそう言つて隊員に誘導して貰いながら手をヒラヒラ振り、足早に去っていった。

なんだろう、何かで売れている人なんだろうか。

「あ、ありがとうございます、助けていただいて……」

「ありがとうございます、助かりました」

「ああ、二人とも大きな怪我が無くて良かったよ」

二人まとめて挨拶。

緑髪の子、確かランカって言ってたな。まだ微かに震えているな。

と思っていたとお兄さん、オズマさんが来て、
まだ何か言いたそうなランカちゃんを連れて格納庫から姿を消して
しまった。

こっちの青年はよく見てなかった判らなかったが相当な美男子だな。
と、ここで青年が……

「あの、一つ聞いていいですか」

「ん？なんだ、え」と……」

「早乙女アルトです、貴方は……」

「ゼノン・グレイブだ。それで？」

お互い名乗り、握手。

「ゼノンさんの機体は……始めて見るんですが新型ですか？」

「ん、簡単に言えばワンオフってやつ」

「凄いですね……、名前はなんて言うんですか？」

「ガンダム、ガンダムF91だ」

「ガンダム……（やっぱりバルキリーとは根本的に違うな……）」

ガンダム、と呟きながら早乙女アルトはF91を見上げる。

「ガンダムにはちゃんと意味もある」

「あるんですか!？」

「どうやら無いと思っていたらしい。」

「あるさ、バルキリーも北欧神話の戦乙女のワルキューレから来ているだろ?」

「ええ、そうですね」

「ガンダム、その意味は『戦う為の力』だ」

「戦う為の……力」

「そうだ。」

そしてそれは敵に対してだけでなく自分にも、運命に対しても……」

「……」

そう言いながら、ゼノンはF91を見上げながら黙ってしまつた。その様子に、アルトは何も言えなくなってしまうた。

「……おっと、すまない。で、満足してくれたか?」

「あ、はい。ありがとうございます」

そしてまた会おうと言い合い、アルトは別の隊員に誘導されて格納庫から去っていった。

それを確認すると、雰囲気が一変する。

背中越しに感じるピリピリとしたモノに対して一回、大きな溜息を吐いてから振り向く。

「さて……オズマさん、できればその銃を降ろしてほしいな」

振り返りながらいつの間にか隊服に着替え、ハンドガンを構えているオズマ・リーに対して言う。

その後ろには同じくライフルを構えている別の隊員が数名。

その後方、よく見えないが気配で青いバルキリーの陰にスナイパーが一人。

「本来なら俺やギリアムを助け、民間人を保護し、

尚且つ船団防衛にも尽力してくれたお前にこんな物は向けたくはないんだが……」

「だが……何です？」

「お前は何者だ？」

調べてみたが、ゼノン・グレイブという者はこの船団には居ない。

それに加えそのガンダムとかいう機体、傭兵が用意出切る様な代物とは思えん」

ほお、この短時間によく調べたもんだ。

流星、民間とはいえ軍事会社ってことか。

「……わかった、話すからその銃を降ろしてくれると嬉しい」

お互い睨み合いこと数秒。

少し間があり、スツとオズマが銃を降ろすと後ろの数人も銃を降ろした。

雰囲気も幾分か柔らかくなる。

だがスナイパーだけは視線を外しそうにないな。

「いいだろう、だが妙な抵抗はするなよ」

「しませんよ」

「よし、着いて来い」

周りを囲まれ、警戒されながらオズマの後ろを着いて行く。暫く歩き、分厚い扉を潜るとブリッジと思われる場所に到着。目の前には顔に傷と髭を蓄えている壮年の艦長らしき人物。その後ろにアフロの背の大きな男、横に三人の女性。

「マクロス・クォーター艦長、ジェフリー・ワイルダーだ。よろしく、ゼノン・グレイブ君」

「ゼノン・グレイブです。よろしく、ワイルダー艦長」

お互い目を見ながら、握手。
流石、艦長だけあつて鋭い眼光だ。
顔の傷から察するに、相当の兵だな。

「さて、ゼノン君。
オズマ君にも聞いたと思うが、君とあの機体の事を話してくれるかな？」

雰囲気少し、重くなる。

「……わかりました、その変わりコソの目と耳を塞いで欲しいのですが」

「……いいだろう」

ジェフリーは首だけを後ろに動かし頷くと三人の女性の内一人がコンソールに向かい、
ボードを数回叩き、戻ってきて敬礼をして再び元の位置へ戻った。

「これでこれから君の話す事は我々意外には漏れることも無い。
安心したまえ、ココにいる者達はそういう心配は無い、私が保証しよう」

「……わかりました」

ココに居る人物はジェフリー艦長、オズマさん、アフロの人、三人のオペレーターらしき女性、
青髪ツインテールの子供、その左右にグラマーな女性二人、眼鏡の色男、幼さ残る少年。

一礼して、全員に向き合い言った。

「では、皆さん始めまして。
異世界人です」

「「「「「は?」「」「」「」

まあ説明は省く。

「フム……まるでSF小説のような話だな」

「俺としてはこの船も十分SFですけどね」

それも超ド級。

「それは言えているな、一昔前は宇宙に出るだけで大騒ぎだったからな」

「それも衛星軌道を周るだけで」

ハハハと艦長と笑い合う。

「で、信じてもらえましたか？」

「君のガンダムという証拠もある、信じるほかないだろう。ルカ君」

「はい」

ルカ、と呼ばれて出てきたのはまだ幼さ残る少年が端末を持って出てきた。

「はじめまして、ゼノンさん。ルカ・アンジェローニです」

「はじめまして、ゼノン・グレイブだ」

まだ若いな、と思いながら握手。

「勝手ですが、機体のデータを取らせてもらいました」

「かまわない、わかっていたからな」

「ん？どういう事かな？」

勝手に、なので当然反論なり何なりが出ると思いきや、分かっていたなんて言うからジェフリーが疑問に思うのは当然である。

「それについて説明します。」

彼とあの機体、ガンダムF91と言っていますが常にリンクしているんです」

「ふむ………どういうことかね？」

「そもそも機体の操縦方法がこの世界では考えられない物です。パイロット自身の動きをそのまま伝えるという極めて特殊な物なんです」

「何!？」

「じゃああの動きをゼノンがやっていたというのか!？」

「思わず声を上げたのはオズマ。」

ココの誰にも負けない腕を持っているオズマから見ても、先ほどの動きは尋常ではなかったのである。

「はい、システム面も完璧でタイムラグは無いです。」

あとYF-21に搭載されていたBDIシステムに似た物も搭載さ

れています。

B D Iの方は機体に乗らないと反映されませんでした。F 91に搭載されている物は機体から降りていても脳波で簡単な操作ができるようです。

あと……よくわからないのですが全身のフレームがサイコ・フレームという特殊な物らしいです」

「サイコ・フレーム？」

「ええ、詳細を見ようとしたんですがこれ以上はどうやっても駄目だったんです」

「ルカでも駄目だったのか……」

と呟く眼鏡の色男。

その後もF 91に関する機体説明を数分。

簡単に言えば異世界の機体であると証明された。

「それで、艦長は俺とF 91をどうするんですか？」

「そのことなんだが、君は迷子で無一文な訳だろ？」

どごその野郎みたく、俺に構うな。とは言えない。

「……まあ、そうですね」

「S・M・Sでその力を使ってみる気はないかね？」

それはそれは、願っても見ない誘いじゃないか。

しかし、冷静にいこう。

「いいのですか？」

「軍の方にはS・M・Sが独自に開発した新型と言えいい。それにココは軍とは独立している。」

身寄りの無い君自身もそのほうがいいのではないかな？」

流石、お見通しで。

観念したように一息吐き、ニヤツと笑いながら言う。

「流石ですね。」

ではお言葉に甘えさせていただきます」

「よろしい、ではこれからよろしく頼むぞ、ゼノン君」

敬礼をしながら、改めて。

「はっ！」

こちらも敬礼を返す。

そうしているとオズマさんが近づいてくる。

「お前の話を聞いてから、こうなるんじゃないかって思っていたら本当になっちまったな」

「俺もそんな気がしてましたけどね（半分は計算だが）」

フツと笑いあうも、スツと背筋を伸ばしオズマは改めて名乗る。

「S・M・Sスカル小队リーダー、オズマ・リー少佐だ。」

コールサインはスカル1（リーダー）、よろしく頼む」

「S・M・S所属になりましたゼノン・グレイブ、よろしくお願
い
します」

その後も立て続けに名乗りあい、全員と面識を持った。

アフロのファンキーな人はオカマだと分かったが、いい人みたいだ。

こうしてゼノンはS・M・Sの所属となった。

しかし、何か引っかかっていた。

あの青年。早乙女アルトとは何故かまた会つと確信めいたモノが頭
から離れなかった。

それは後日、現実となる。

二人の歌姫と共に銀河を駆ける、この物語は始まったばかりである。

S・M・S（後書き）

今回はここまで。

思ったのですが、虚空歌姫はいいとして恋離飛翼を書いていいのでしょうか？

今現在公開中の作品なのでネタバレになってしまうので。

で、考えているのは、
前半を映画、後半をTV版を元に書いたほうが良いのかと思ったんですよ。

別にネタバレおkの人と、嫌だ、
な人がいると思うので皆様の意見を聞きたいです。
お願いします。

再会（前書き）

一週間。

この一週間はとても短く、忙しく感じました。

今回の地震で亡くなった全ての人々に御冥福を祈ります。

今現在、頑張っている人達には「頑張つて」としか言えません。
自分には募金位しかできないので。

ごぞ。

再会

S・M・Sに入隊してから次の日。
ゼノンとはある部屋の前まで来ていた。

「ここか…」

病院らしい白で統一された清楚な印象を受けるドア。
その横の表札にはヘンリー・ギリアムの文字。
4回のノック。

「どうぞ」

聞こえてきたのはギリアムの割りど元気な声。それを聞いて自然と
顔が緩む。

了承を確認すると、ドアを開ける。

「失礼しま……」

そこまで言いかけて止まってしまった。
何故かという中にいるはずの無い人物が居たからである。

「早乙女……アルト？」

「あ、ゼノンさん。また会いましたね」

そう、あの時助けた青年早乙女アルトが居たのである。

「あ、ああ。しかしどうしたんだ？」

「それは……」

アルトがその理由を話そうと口を開いた瞬間、三者の声が重なる。

「それについては俺から話そう」

ドアの開く音と共に後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「オズマさん」

後ろを振り返りながらそう言つと軽く手を出して少し待て、の合図。コツコツと規則正しい間隔で歩を進めゼノンの前を通り過ぎギリアムの前まで来る。

「元気そうだな、ギリアム」

安堵したような、悲しいような。

そんな目でギリアムを見た気がした。

聞いた話では、オズマとギリアムはS・M・Sに入る前までは新統合軍で同じ部隊にいたそうだ。

S・M・Sでも古参らしい。

「ええ、腕はこんななんですけど他は大丈夫です。わざわざありがとうございます、隊長」

両腕にギブスを付け、天井から吊るされている腕に目配せしながらも、

二カツと歯を見せながら笑うギリアム。

「いいんだ。
それより、いいのか」

「はい、医師から完治してもバルキリーの操縦は、もう無理だと。
いい機会だと思っています。」

隊長達と共に戦えないのは残念ですが、妻と子供のこともあります。
キチンと父親やってあいつらを一番近くで守ってやりたいと思っています。」

その話を聞き、ゼノンは嬉しいような悲しいような、微妙な気持ち
になった。

確かにS・M・Sを辞めればごく普通の父親として生活できるだろ
う。

ココS・M・Sに勤めることは関係者以外には口外無用の守秘義務
が課せられている。

さらに民間企業であるS・M・Sの被雇用者は軍人ではないため、
戦闘行動中に殉職した場合も事故死の扱いとなり、

戦没者墓地への埋葬などの栄誉は与えられず、遺族にも詳細な事実
が伝えられない。

家族がいるギリウムにとってそれは仕方ない事なのだが、家族から
見れば意味不明だろう。

それにいざ戦いとなり家族を連れて逃げる傍ら、戦っている元同僚
達を見て疼くだろう。

心苦しく、悔しい思いもイッパイになるだろう。
しかし、家族の為、子供の為。

「……そうか」

「それでなんですが、俺の機体をコイツに継いでもらいたいんです
よ」

「なに!？」

顎をクイツと動かし、アルトを指す。
流石のオズマも驚いた声を上げる。
ゼノンも目を見開いている。

「いくらお前の頼みでもそれは無理だ。
確かにお前の後は決まっではないが、クイツにそれができるとは
思えん。」

それに軍事機密を見た傍ら、クイツの……早乙女アルトの処分は我々S・M・Sがやることになっている」

「だからですよ、隊長だつてランカちゃんを”裏”から逃がしたじやないですか」

ニヤリ、と悪い笑みを浮かべるギリアム。

「う……、だがそれとこれとは話が別だ」

効果音付けるならギクリ、と言ったところか。

そしてその時、ゼノンは見た。

ランカのことを言われた瞬間、オズマの汗の尋常じゃない出方を。

「そうでもないですけど、隊長。

クイツと一緒に救出、保護されたシェリル・ノームだつて何やかんやでお咎め無し。

ランカちゃんは隊長が裏から。

残っているのは、クイツだけ。

ちよつと理不尽じゃないですかい？」

「それは……そうだが……」

もう一押し、つてところか。

「……なら、入隊テストをやってみたらどうです?」

「本気か、ギリアム!? こんな素人に……」

「オズマさん」

スツと会話の最中にゼノンが割り込む。

誰も予想していなかったのか、全員の視線がゼノンに向く。

「いいんじゃないですか? 入隊テスト」

「ゼノン、お前まで……」

「元はと言えば俺の所為もあります、
あそこで保護せず近くのシエルターに連れて行かなかったのは俺の
判断ミスです」

「しかし……」

考え込むオズマ、その隙にギリアムはアルトに目配せをする。
そこでハツとしたのか、アルトは勢い良く立ち上がり声を出す。

「俺からも、お願いします!」

そう言うと同時に頭を下げる。

「……理由を聞こうか」

「俺は……目の前でギリウムさんが苦しんでいるのに叫ぶことしかできなかった。

EX・ギアを着けていて飛べるのに、ただ叫ぶことしかできなかった……。

それが悔しかった。

あいつを助ける時は飛べたんだ、飛べて助けられたんだ。なのに……！……！」

拳を握り締める音が室内に響く。

その様子を見たオズマは静かに口を開く。

「……いいだろう、早乙女アルト。

ギリウムとゼノンの頼みだ、明日の午前7時にS・M・Sの前で待っている」

「は、はいッ！……！」

はてさて、どうなることやら。

その後、アルトは帰りゼノンはオズマとギリウムと少し話し、

途中から来た奥さんにお礼を言われ、なんだかむず痒い思いをした。

ゼノンがアルトに見たイメージ。

それは青い空だった。

なんでかやたらと飛ぶことが似合う奴だと思った。

何の因果か、飛ぶための翼を手に入れたがソレが戦場の空になるなんて。

不思議とゼノンはアルトと共に飛ぶイメージは明確に想像できた。何でだろうか。

まだ入隊も決まっていけないのに、変な確信めいた予感があった。

妙なワクワク感を潜ませながら、ゼノンは明日を待つのであった。

- - - - -

夜になり、街の光りも少なくなった頃。

ゼノンは街を眺められるグリフィスパークという場所に来ていた。

「異世界か……」

草を踏む独特の感触と音を楽しみながら歩き、ベンチに座る。

深呼吸。

視線を街から上に向ける。

「見たこと無い星ばかりだな……」

あれは鯛焼きに見えるな……」

そう呟き、改めて自分が異世界に来たのだということを実感する。

暫く星を眺め、時たま吹き抜ける風の心地良さと揺れる草木の音を聞く。

「こついうところは違わないんだな」

地球の風と寸分変わらない自然の起こり。
僅かな違和感はあるがその技術に関心しながらも、星を見ていて何か物足りなさを感じる。
なんだろうかと暫く考えていると、

「あ」

と間抜けな声を出して、気がつく。
地球に居れば毎夜でもないが必ず見ていたモノ。
夜の暗闇を照らしてくれたモノ。

「そうか……そうだったな。」

ココには月がないんだったな」

妙に寂しい気持ちになりながらも、夜を過ごした。

再会（後書き）

ギリアムとアルトに関してはゼノンが来る前に、アルトが病院に押しかけ、アルトの言葉に確かな覚悟と熱意を感じた。つてな感じですよ。

次回更新までアンケートは続けたいと思います。
恋離飛翼のネタバレ「おk」か「嫌だ」かを。

次回、入隊テスト編かも。

入隊テストで（前書き）

三日以内とか言いながら4月3日になってしまった。
本当に申し訳無い。

次の更新もココから先二週間位ほぼ休み無しなので遅れるかもです。
マジすいません。

どうぞ。

入隊テストで

入隊テスト当日。

ハンガー内。

「へえ、ランカちゃんが」

「ああ、今頃歌っている筈だ」

その知らせをアルトから聞いたのは入隊試験が始まる直前、パイロットスーツに着替え、自身の機体に乗る前の時だった。そうそう、パイロットスーツなのだが皆とは違い特注で作ってもらった。

見た目は第二次ネオ・ジオン戦争時の、連邦軍の白に青いラインの入っている物にもらった。

ハンガーに並ぶ鋼の巨躯とそれぞれのパーソナルカラーで彩られた戦闘機。

発進まで後少しという時に、アルトが話しかけてきたのだ。

「ミス・マクロスか……」

「伝統なんだよ、一応な。」

あ、あとゼノンにも会いたいって言ってたぞ」

「俺に？」

「ああ。お礼がキチンと言えなかったから、って」

「ああ……あの時無理やりオズマ隊長に連れて行かれたからなあ」

「そうだよなあ……」
隊長に連れて行かれる時ゼノンにまだ何か言いたそうだったのは覚えてるよ」

ハハッと笑い合っているとスピーカーからオズマの怒鳴り声が響く。

『お前達、何をモタモタしている!!』

キーンと耳が鳴る。

「おうおう、耳が潰れちまうじゃねえか。
さてアルト、覚悟はいいか」

「とつづくに出来てるぞ」

互いニヤリと笑いあい、拳を合わせる。

そのまま背を向けそれぞれの機体に取り込んだ。

ゼノンはコックピットに乗り込む。

開いていたハッチが閉まり、真っ暗なコックピットに立ち、目を瞑り、で呟く。

「ダイレクト・リンク」

その呟きと同時に、体の隅々まで感覚がシャープになる。

「各機能オールグリーン、トレース良好……」

頭の中に直接状況が伝わり、腕を動かし確かな感触を確かめる。

そこまでチェックしていると、まるでタイミングを計ったように丁度カタパルトに到着する。

目を開く。

その目はF91のモノと同じになり、視界に映るのは果て無き宇宙と無限の星々。

隣にはアルトが乗るスーパースティック装備のVF-25。

ここでオペレーターから通信が繋がる。

「どうもゼノンさん、専属オペレーターになったラム・ホアです。聞こえますか？」

「ああ、良好だ。流石はフォールド通信だな」

そう、実は突貫でフォールド通信機をF91に組み込ませてもらったのだ。

突貫、とは言ってもUG細胞のお蔭か、通信機器そのものをコックピット内部の何処かに接触させれば勝手に取り込んでくれるので楽でいい。

困ったのは終わった後で整備の奴らとルカからどうやってたらそんな短時間でできるんだ、

と問い詰められた時はマジでやばかった。あの血走った目は尋常じゃない。

整備といえば、F91専属の整備員が付くこととなった。

ルカ・アンジェローニである。

やはり異世界の機体ということで目を光らせて俺に取り次いできたのだ。

まあ詳しく話すのはこの入隊テストが終わった後なんだけどね。

「でしょ、ゼノンさんの世界じゃその粒子のせいでもな通信ができなかつたんでしょ？」

「ああ、レーダーとかも高濃度に散布されるとロクに機能しなかったからな」

この 粒子じゃなくてミノフスキー粒子だけだね。

「その点じゃ心配無しです。

じゃ、あんまり話すと怒られるので、発進どうぞ」

「了解。ガンダムF91発進」

カタパルトとは言ってもバルキリー用の物を使わせてもらっている
ので、

その場からスラスターを噴かして発進する。

アルト機もほぼ同時に発進し、横に並ぶ。

程なくして戦闘宙域に到着。

アルトから通信が入る。

「相手はピクシー小队、年はまだ若いけど腕はベテラン、か……」

「ピクシー小队……妖精^{ピクシー}ね」

ゼントラーデイの女性三人で構成されるピクシー小队。

クアドラン・レアで編成されるS・M・Sの中でも腕利きの部隊である。

ここで疑問に思っている人もいるだろう。

今回は早乙女アルトの入隊テストじゃないのか？と。

確かに今回は早乙女アルトの入隊テストでもある。

今回のテスト、厳密に言えばアルトとゼノンの入隊テストである。

なんで？と思うのも無理はない。

ゼノンには既に入隊済みなのに何故テストを受けなければならないのか？

それは少し前の会話を聞いていただければ理解できるので……Q!!
それは入隊テスト前のブリーフィングの時だった。

「てなわけでオズマ隊長、俺はアルトと一緒にテスト受けますんでよろしく」

「なにが、てなわけでだ！お前は既に入隊しているからテストを受けけることは認められん」

「なぜですか？確かに俺は入隊していますが、ちょっと特殊な方法で入ったんですよ。」

それに、まだ視線が少し痛いのでね……」

そう、当然と言えば当然なのだが隊員の視線が痛い。

確かに入隊したのだが、これは特例であり他の者達のように正規のテストを受けた訳ではない。

その者達から見ればゼノンは「なんだコイツ」てな感じで見られている。

「ふむ……しかしだな……」

考え込むオズマに以外なところから声が掛かる。

「いいんじゃないですか、隊長」

「ミシエル……」

そう、眼鏡の色男ミハエル・ブランだ。

「俺達の殆どがゼノンの実力を知りません。

他の隊員達にとっても示しになると思いますが。その変わり……」

彼の言う通りである。

ゼノンの実力を知っているのは実際ソレを見たオズマとギリアム、
後で記録映像で見たジェフリーとブリツジクルーだけ。

確かに丁度良い機会である。

そう言うとミシエルはオズマに耳打ちをする。

「どうです？」

「……いいだろう、許可する」

「ありがとうございます」

慣れた動作で敬礼をし、ルカに声を掛け去って行く。

その去り際にゼノンにニヤリと笑いかけ、足早に去っていった。

その笑みにゼノンは何かあると感じた。

「よし、早乙女アルト、ゼノン・グレイブ両名は自機で指示がある
まで待機」

「了解」

てな感じで回想終了。

場面は戻る。

.....

意思が走る。

敵意まではいかないが、それなりに自分達に向けられたモノに気づく。

「来るぞ、アルト……四つの意思がコチラに向かってくる」

ん？あれ？四つ？

「あ、ああ（意思？何を言っているんだ？）」

F91のツインアイが青く光る。

「（この感じは……ミハエルか。なるほど）
……牽制する」

見えるのは三つの光りの尾。

その場から若干上昇し、ビームライフルを二発発射。
無論、当てる気は無い。

向こうは射程外ということもあり予想外だったのか、三つの光りが
乱れる。

「いくぞアルト……！」

「おっ……！」

二機は乱れた隙に一気に接近を試みる。
だが流石と言うところか、赤いクアドランの動きと指示により他の二機もすぐさま立て直す。
思ったより早いな。と考えていると別の方向から視線と迫るモノを感じる。
遠方より青いビームが迫る。
それもゼノンのみに向けられて。
だが感知していたゼノンにその程度の狙撃は脅威にはならない。
スラスターを噴かすことも無く、僅かに体を捻るだけで難なく避ける。

「……俺だけを狙ってきた？
いいだろうミハエル、その挑発に乗ってやろう。
アルト！！」

「なんだ！？今忙しい！！」

見ればケツに二機付かれている。確かに忙しそうだ。

「スナイパーを仕留めてくる。暫く任せるがいいか？」

「わかった、さっさと行ってこい！！」

そう叫びながらアルトはガウオークに変形し、迫っていたミサイル群を撃ち落とす。

さらに後方から迫るミサイルをバトロイドに変形、左右に動きながら撃ち落とす。

同時にコチラからもミサイルを放ち、ファイターに変形し未だ晴れない煙の中へ突っ込む。

それを見てゼノンは大丈夫そうだな、と思い方向転換したその時、

再び意思が走る。

僅か遅れて、いつの間にか下に回った赤いクアドランから閃光が走る。

「っつ」

その場で宙返りで避ける。

すぐさま体制を直し、迎撃しようとするがさらに別の敵意が迫る。

「ちい！」

スナイプ。またもミハエルの狙撃。

さらにピクシー小隊隊長クラン・クランの赤いクアドランが放った無数のミサイルが視界に広がる。

だがゼノンには慌てること無くF91の頭部、肩部、胸部の計六門の銃口から火を噴かし迎撃する。

二秒足らずで全ミサイルを撃墜。

一旦体制を立て直す為に近くの岩陰に隠れる。

確か、ミハエルとクランは幼馴染だって言ってたな。byボビー情報。

なるほど、あのコンビネーションの良さも納得だ。

どうしたもんかな……。

とゼノンが考えている時、ミシエルとクランも同じく岩陰に隠れ分解していた。

「クソッ！」

どうなっやがる、あのタイミングで避けるなんて……！！！」

スナイパーとして己の腕に自信を持つミシエルには、ゼノンがあのだいキングで完璧に避けられたのに対し苛立ちを感じられずにはいらなかった。まるで背中に目が付いているような……そう思うほどである。

「……そうだな、タイミング・位置・状況、どれをとっても完璧な筈だったのに、避けた」

それはクランにも言えることだった。

そしてクランはゼノンとアルト以外で行った秘密のミーティングでのオズマの話の思い出す。

その話とはゼノンが何らかの超能力者ではないか？というものだった。

オズマ自身も確証が在る訳ではないが、思い当たる節がある程度なのだが。

それを聞いたオズマ以外の隊員は笑うを通り越して失笑モノだった。しかし、オズマは自機とギリラム機に残っていた、

先日の戦闘の様子を他の隊員達に見せると殆どの隊員達が言葉を失った。

戦闘技術は勿論凄まじいの一言。だが、それは二の次だった。

隊員、それも戦闘員はその戦闘の異常性にすぐに気がつく。

その異常性とは何か？

そう、当たらないのだ。

確実に死角からの攻撃に対し、まるで見えているかのように避けるのだ。

始めの内は単なるマグレか勘かと思ったが、違う。

確実に、そう来るのが分かっている当たり前に避けているのだ。

誰もが確信した。

そしてそれは攻撃の際にも言えた。

誤射に思えるような射撃に、バジユラが当たりに行っているように

見えたのだ。

予測して撃っているのだろうが、そう見えてしまう異常性。たしかにある程度であれば予測して撃つことなどパイロットでなくともよくやることである。

がしかし、それはどんな熟練のパイロットであっても確実に当たるなんてことはない。

だがどうだろう。

ゼノンの駆るF91の射撃は映像で見る限り文字通り百発百中である。

牽制の射撃を抜けば、ほぼ100%と言ったところか。

「オズマがアイツがエスパーだって話、信じたくないが嘘じゃなさそうだな」

「なっ！？クラン、いくら隊長が言ったとはいえそんな話を信じるのか？」

「そうは言ってもミシエル……」

そんな話をしている時、ゼノンは彼らの直上にいた。

「なあにをイチャイチャしてんだか……」

イチャついてる、と細かいことは分からないが、

自分に向けられていた意思が随分と弱くなっているのを感じ、来てみればコレである。

だが模擬戦……じゃなかった、入隊テストとはいえそんな隙を見逃す程甘くは無い。

とは言えこのまま撃墜など容易いの一言。

暫く考え、ピコンとアイディアを思いつき早速行動に移す。

ビームライフルを構え何時でも発射できるようにしてから、
たった一言を言う為にクランとミシエルに通信を繋げる。

「捉えたぞ」

同時にビームライフルを二発放つ。

「「なッ!!!」」

あまりの驚きに二人の声が重なる。
避けるだの何だの考えるよりも先に、有無を言わず咄嗟にスラス
ターを噴かす。

ここでクランのモニターに右方の駆動系、武器使用不可の文字が映
る。

対するミシエルのモニターにはメイン武器、スナイパーライフル使
用不可の文字。

さらに警告音が響く。

「クソッ!!!」

「ちい!!!」

ミシエルは咄嗟にバトロイドからファイターに変形して逃れようと
するも、

その道を青いビームで塞がれる。

同じくクランも別の方向に逃げようとするもやはり青いビームに塞
がれる。

そして……

「チェックだ」

響くゼノンの声。

見れば腕を交差させビームライフルをクラン機に、
ビームサーベルをミシエル機に向けたF91が丁度二機の間이었다。

「……………はあ」

「……………負けた、か」

……………

通信を入れゼノンはアルトの所に向かおうとした時、ミシエルから
声を掛けられる。

「なあ、ゼノン」

「なんだ？ミハエル」

「あ……………そのミハエルつての止してくれないか？
仲間なんだ、ミシエルつて呼んでくれないか？」

「いいのか？最初は敵意剥き出しだったくせに」

「う……………」

敵意、というよりは仲間として認めないオーラだったかな。

まあそれも尤もだ。
異世界から来て、ギリアムを助け、オズマに認められ、仲間になっ
て……。
隊員達の中には気に食わない奴もいるだろう。
それはしょうがないこと。

「だがお前から仲間と言ってくれて俺は安心したぞ、ミシエル」

「ああ。ま、これからよろしく頼むよ」

「素直じゃないな、ミシエル」

「うるさいぞ、クラン」

「仲良いなお前ら」

「「「うっさい」」」

とまあ夫婦漫才を見て楽しんでいると、自分に向けられたモノでは
ないが明らかな敵意が走る。
この感じは憶えがある。

少し遅れて、アルトが戦闘しているであろう空域付近で赤い閃光が
走る。

「バジユラか！」

「何！？」

「アルト達の方が！」

スラスターを噴かし、アルト達の下へと向かおうとした時クランから声が掛かる。

「ゼノン、私達の装備は全て訓練用の物だ。
バジユラには全くと言って良いほどダメージは与えられない……三人を頼む。」

「ああ、当然だ」

ココで説明しておこう。

S・M・S組の装備は全て訓練用の物である。ミサイルも訓練用の特別製である。

対するゼノンの装備は実戦と変わらない物を使っている。

それで大丈夫か？とお思いだろうがそこはご都合主義というやつだ。簡単に言えば威力を調節しているのだ。

ビームの威力は生身の人に直に撃つても「あちっ」という位で済むまで絞っている。

そんな説明をしている内に到着。

ボロボロに朽ち果てたゼントラーディ艦の近く。

そこには丁度バジユラを一匹、見慣れない武器で撃墜したアルト機の姿。

お決まりのポーズをとっている最中だった。

しかし、気配を潜めたバジユラ（大）が後ろに居ることに気づかない。

だが、ココから見れば良心的である。

戦闘用に威力を切り替え、特に焦ること無く狙いを定め、トリガー。完全に感知外の攻撃。バジユラは青い閃光に貫かれ爆散。

「ようアルト、一匹撃墜したからって油断し過ぎだぜ」

「ゼノンか……助かった」

若干息が荒い、当然と言えば当然か。
だが良い経験になったろう、アルトには。

「さて、バジユラはもう居ない。帰還するぞ〜アルト」

「ああ、帰ろうか」

- - - - -

結果から言おう。

合格。

まあ当たり前と言っちゃあたり前。

何せアルトは分かれた後ピクシー小隊の二機を撃墜してのだ。

スーパーパックに被弾したものの、機体本体には攻撃は届いていなかったのもある。

その後のゼントラーディの武器を使いバジユラの撃墜も評価に入
った。

あのポーズはちょっと頂けないが……。

まあ90点と言ったところか。

ゼノンも文句無しの合格。

んでもって早速明日隊員としての呼び出しである。

何を言われるんだか……。

入隊テストで（後書き）

お気に入りが増以上に増えていてビックリでございます。

マジ感謝。超感謝。

皆様ありがとうございます。

やる気出まくりです。

アンケートなんですが、取りあえずネタバレありの方で行きたいと思いません。

見ていない方には申し訳ないと思うのですが、

結末は劇場版本編とは違う結果になるのでご安心を。

次回、日常編を1、2回やるつもりです。

スター・デイト？（前書き）

いやはや、遅くなって申し訳ありません。

その分内容が良く……なるわけがない。

一人暮らしになって思いのほか大変でして……。

次回更新はなるべく速やかに上げたいと思います。

どうぞ。

スター・デイト？

その日、アルトは知らない内に居なくなりミシエルとルカも出かけてやることも無いので、

せつかく異世界に来たのだ、丸一日フロンティアを楽しもうとしていた。

そんな時だった。

「そういう訳だから頼んだぞ、ゼノン！！」

「ちょ！？せつかく『フロンティア一日散策』を楽しんでいたのに！！」

「だからお前に頼むんだよ！いいか、これは隊長命令だ。

それに俺は政府に呼ばれてこれからアイランド1に行かなければならん」

政府に呼ばれる。

この非常時に呼ばれるってことはバジユラ関連以外は考えられない。

「……バジユラ関連ですね？」

「……ああ」

やはり。

となると仕方が無い、か。

「わかりました、ランカちゃんの搜索は任せて下さい」

「悪いな」

そこでオズマからの通信が切れる。
ゼノンには手に持った携帯を閉じるとポケットに押し込んだ。
一回の溜息。

「とは言ったものの……まだ完全に地理を把握できてないからどうやって探したのか」

フロンティア船団、もといこの世界に来てから一週間も経っていない。
それも初っ端から戦闘に介入し、S・M・Sに入隊して入隊テストをやって……。
やっと何も無い日が来たと思つた矢先コレである。

「とりあえずは高い所に登るか」

歩いていた大通りから脇道に入り、誰も居ないことを確認すると三角跳びの要領で跳躍。

左右のビルを蹴り、その驚異的な脚力であつという間にビルの上に到着する。

そしてこっそりと下を見る。

そこには慌てふためいている黒服の男が三人。

「ハハツ、慌ててる慌ててる。

悪く思うなよ、流石に気持ち悪くなってきたからな」

S・M・Sを出たときから尾行。

何もしないんじゃない見逃すか、と最初は思ってたはいたが……、
二度目とは言え異世界の、それもマクロスの超長距離移民船団に来

て始めての観光？なのだ。

尾行なんか着いて来られたんじゃ気持ち悪い。

いつ撒こうかと思っていたので、オズマ隊長からの電話はタイミン
グが良かった。

そうどうでもいい考えを捨て去り、ゼノン は視線を街に移す。

「さて、どこから探すかな……と、ん？」

首だけを左右に動かし目的のランカを探していると見慣れた奴が目
に入る。

「アルトじゃないか、それに隣にいるのは……シエリル・ノーム！
？」

目に入ったのはアルトと仲良さげに並んで歩く銀河の妖精シエリル・
ノームの姿。

そこにはステージで歌う銀河の妖精の姿は無く、

一人の、ごく普通の……デートを楽しむ笑顔の女の子の姿があった。

「へえ、アルトの用事がまさかデートだったとは……しかもあのシ
エリル・ノームと、か」

盗み見は良くないが、見つけてしまったので仕方が無い。

暫く見ていると二人はアイランド1行きの電車に乗って行った。

「さて、俺の方も探すかな」

後でからかってやろうと思ひ、今はその考えを奥にしまう。

そう呟くと、ビルを飛び移りながらランカを探しに跳躍した。

- - - - -

ランカ搜索の電話はゼノンは勿論のこと、ルカとミハエルにも伝えられていた。

ルカはナナセに乗せられて？一緒に搜索に出かけた。

しかしミシエルは探す気などサラサラ無かった。

隊長命令とは言え、ハッキリ言えば面倒だった。

しかし、そう思っているとしたら、ソレが目の前で起こったり、見つけたり……するものである。

「どこ行くの、ランカちゃん！」

「どこだっていいでしょ！」

まるで聞く耳持たぬ、といった感じが。

走っている車間の僅かな隙を見つけ反対の道路に走って渡るランカ。ハアと短い溜息と軽い舌打ち。

「これだからお子様は……」。

けど見つけちゃったもんなあ」

見捨てる訳にもいかず、ミシエルはランカを追いかけていった。

早足で、手は握り、肩は強張り……見てすぐに怒っていると分かる歩き方。

ズンズンという効果音が聞こえてきそうな感じである。

その様子を見て、ミシエルは再び溜息を漏らす。

- - - - -

暫く時間が経った時だった。

ゼノンは纏わりつく複数の視線を感じ、歩みを止めていた。流れるような動きで人気の無い路地裏に入り、背後に声を掛ける。

「薄気味悪い奴らだな、何の用か知らないが姿を見せたらどうだ？」

そう言うとゾロゾロと全員が同じ変なコートを着たグラサンが六人現れた。

暫くの沈黙の後、ゼノンが「何者だ」と言う前に一番前の男が、

「貴様は何者だ」

と言われてしまった。

今まさに同じ言葉を言おうとしていたゼノンはなんとも言えない気分になった。

しかしソレも一瞬。体を、思考を切り替える。

「それはコッチの台詞だ、揃いも揃って同じ恰好しやがって」

「コチラの質問に答えてもらおう」

どうやら俺の問いには答える気は無いらしい。

けどまあ……、俺も答える気は無いがな。

「嫌だ、と言ったら？」

ニヤリと笑みを浮かべながらゼノンと言う。

「……不確定要素は排除する」

案の定、予想通りの答え。

その言葉と同時に、六人は一斉に動いた。

四人が一斉に飛び退きながら懐から銃を取り出し、着地と同時にゼノンに向けて撃ってきた。

二人は両壁を走り、腕からナイフを出し高速で迫ってくる。

迫り来る銃弾を地を這うようにして避け、壁を走る二人を無視し、銃弾に勝るとも劣らない速度で四人に接近。

「なんだとツ!？」

一人が驚愕の声を上げる。

その思いは全員が一緒だったのだろう、四人の動きが止まる。

その隙を見逃すゼノンではない。

殺しはしない威力で、とは言っても骨の二〜三本は折れるであろう威力で手前の奴を殴る。

「グボあ!？」

「「「!」「」」

殴られた相手は苦渋の声を吐き出しながら後方に数メートルは吹っ飛んだ。

その他の奴らも驚愕の表情で吹き飛んだ奴を目で追う。

「ん？」

しかし、ゼノンは返ってきた感触に違和感を感じた。

「（硬い……だがコレは肉の硬さじゃない、コレは……金属の硬さ）」

その明らかな違いにゼノンはある推測を立て、吹き飛ばした相手を見る。

吹き飛ばした相手は何とも無く立ち上がるも、

ゼノンに殴られた腹の部分からは通常では出る筈の無いコードと煙が出ています。

それを見てゼノンは「やはりか」と呟く。

会った時から感じた妙な違和感、それと同時に殴られた瞬間こそ声を上げたものの、

腹からコードと煙を出しているにも関わらず、

無表情でコチラに歩いてくる奴を見てココに居る六人全員同じサイボーグだと確信する。

そして、これ以上追われぬ為に六人を破壊する覚悟をする。

「そうか、身も心も命令通りにしか動かない機械と成り果てちまつたのか。」

しかも抵抗も抗いもせずに……

人として最後の情け、僅かに残っている感情に免じて苦しまず……殺してやる」

そう言いながらゼノンは腰の革製のホルダーに入れてある、

F91のビームサーベルをそのまま人間が使えるサイズに縮めた物

を右手に持つ。

そして意思を籠めるとソコから青い粒子の刃が煌く。

「「「！」「」」

ソレを見ると六人の刺客は驚愕するも、すぐさま戦闘体勢を取る。

ゼノンはビームサーベルを手首を回して一回転させ、

腰を少し沈め、右脚を前に出し体をやや前屈みにし、止まる。

一回の呼吸。

そして始まりの言葉を言う。

「いくぞ」

同時にゼノンは地を蹴った。

だが……この戦闘が彼らを通じて見られていることなど知りもしなかった。

ゼノンが感じた複数の視線、ソレをゼノンはこの六人”だけ”のものと思った。

しかし実際は違う。

本来なら、ゼノンのNT能力なら気づける筈の完全な悪意。

彼らの裏にある完全な悪意を気づけなかったのは、

目の前で、自身にその命を次々と絶たれてゆく者達の、

僅かに残った渦巻く最後の感情を流すこと無く受け止めていたから。

- - - - -

ゼノンがアイランド1に入ったのはソレから暫く経った時。
何かと気分が楽しくなる、シェリル・ノームとはまた違った生氣に
満ちた歌につられて。

それと同時にココ、ゼントラーディのショッピングモールの巨大さ
に目と心を奪われる。

食品、衣類、食器、家庭用品、電気製品、目に入る物全てが巨大。
ズシンズシンと地響きを起こしながら歩いているゼントラーディの
人々を眺めながら、
人々の意思が集まっている所に歩を進める。
歌が聞こえる。

『 - - - 』

「あれは……ランカちゃん？」

歌の主を見れば、本日探していたランカ・リーではないか。
思わず声が漏れる。

「お、ゼノンか」

その声を聞き、思わぬ人物がから声がかかる。

「ミシエルか」

まさかミシエルがいるとは。

一番居なさそうな奴が居るとはちょっと意外だな。

そう思っていると、自称気味にミシエルが呟く。

「まったく、お子様だと思っていたが……」

俺の言葉はランカちゃんの背中を押したただけだったぜ」

「ん？なんお話だ？」

「気にすんな、只の独り言だ」

「けどまあ……」

「ん？」

『…………』

「良い顔じゃないか、ランカちゃんは」

「…………ああ」

自然と周りも笑顔になる。

そんな力が聴いていて湧いてくる。

ランカ・リーの歌にはそんなモノが籠められているような気がする。

FIRE BOMBERの熱気バサラの熱さとは違う。

銀河の妖精シエリル・ノームとも違う。

非常に女の子らしい、キラキラという言葉が似合っている。

そんな気がする。

そんな事を考えていると、陽は傾き、空は茜に染まる。

ランカちゃんの歌は終わり、聞き入っていた人々も去っていた。

ゼノンはランカちゃんに近づき、声をかける。

「やあ、ランカちゃん。久々」

片手を挙げ、挨拶。

「あ、ゼノン……さん」

「硬くならないでいいよ、歳も大して違わないんだしさ」

「あ、じゃあ……ゼノン、君」

”君”と言われた瞬間、ゼノンの背中がゾクツと震える。

「君付けか……背中がムズムズする」

そうボソツと呟くとそれが聞こえたのか、ランカが心配そうな顔で尋ねる。

「あ、あの……嫌でしたか？」

その表情を見てゼノンは内心若干慌てるも、冷静に返す。

「違う違う、君付けで呼ばれたのが久々だったんでね。

どうもむず痒くて……」

「ああ、なるほど。」

でも私男の子は皆君付けで呼んでるし……どうしよう」

そう言いながらランカは顔を伏せる。

「ああ、そんな真剣に悩むようなことじゃないって。

別に君付けでも大丈夫だって、その内慣れるから……多分」

そう言い終わると同時にランカは伏せていた顔を風切り音が聞こえる程勢い良く上げ、

「ほんとっ？」

「じゃあこれがよろしくね、ゼノン君っ」

さっきまでの雰囲気や嘘のようにニコニコしながらゼノンに向けて言った。

「あ、ああ。」

（あれ？ハメられた？）

何か言おうとしたが、ゼノンはランカの笑顔の前に変な威圧感を感じ、何も言えなかった。

「それはそうとランカちゃん、良い声だね」

「ほんとっ!?!」

「ああ、気持ちも籠ってて。」

何より歌っているランカちゃんはなんて言うかこっつ……キラキラしてた

ゼノンがそう感想を述べると、若干恥ずかしいそうにしながらも極上の笑みを浮かべ、
ゼノンにお礼を言った。

「嬉しい……ありがとう、ゼノン君!」

そこから他愛の無い会話を広げている途中、

少し離れた所で会話をするアルトとシエリルを見つける。
否、見つけてしまった。

アルトの頬にキスをするシエリルの姿を。

「ッ!！」

息を飲む音が聞こえ、ゼノンは目だけを動かし隣を見る。
隣ではランカが顔を赤くして驚いている。

ゼノンはちよっぴり刺激的だったかな?と思うがランカを見てその
考えを即座に捨てる。

「(違う、これは……恋をしている、アルトに。

それと……ライバル出現で覚悟を決めた、って顔だな)」

このゼノンの考えは”ほぼ”合っている。

だが、コレばかりは本人の心の奥で考えているモノなので分かる筈
がない。

ランカの揺れ動く心。

アルトだけに傾いていた心は突然現れたもう異世界の旅人との間で
ゆらゆらと揺れる。

ゆらゆらグラグラ。

揺れ始める。

再び巡り会ったその瞬間から。

そしてそれは、別のところでも既に起こっていた。
言うなれば、運命の出会い。

会うべくして会い、起こるべくして起こる。

これはそういうモノなのかもしれない。

その後、ゼノンはランカと再び会う約束を交わし別れた。

そんなこんなで、この日は終わりを迎えた。

スター・デイト？（後書き）

再びアンケート取りたいと思います。

アンケートと言うよりは助言を頼みたいです。

主人公のヒロインについてです。

戦闘の構想はほぼ最後まで決まっていますが、

恋愛については全くと言っていいほど決まっていません。

そこで皆様にお力添えをお願いしたいのです。

主人公ゼノンとだったら誰が良い感じになるでしょうか？

アニメ本編、ゲームのキャラでお願いします。

感想も待っています！！

次回、ギャラクシーからの救援要請がフロンティアに届くも……。

束の間の平和（前書き）

五月なのに三十度近いつておかしいだろ。
暑くね？

今回はそこまで進展はありません。

どぞ。

束の間の平和

その日、マクロスクォーター内のラウンジでビリヤードを楽しんでいた時だった。

ボビーとの白熱戦を終え、バーカウンターで一杯やっている携帯が鳴った。

《着信 早乙女アルト》

なんだろうか？時間を考えると丁度学校帰りどころだが。

そう思いながらも電話に出ると、予想外の知らせが飛び込んできた。

「スカウトオ!？」

『ーッああもう！声がでけえよバカッ！！電話越しなのを考えるよ！』

「あ、ああ、すまん。しかしスカウトかあ……」

『ああ、それで今からシルバームーンでお祝いをしようってことになっただ。』

『で、連絡した訳さ』

「なる。丁度ランカちゃんとはまた会おうって約束してたからな、良いタイミングだ」

『そっか、んじゃ待ってるぜ』

会話が終わるとピツという電子音と共に通話を終了させる。

即座に携帯をポケットにしまい、ボビーに別れを告げラウンジを足早に去る。

実を言つとカフェ・シルバームーンはS・M・Sから少しばかり遠い。

アルト達を通う美星学園からは近いのだが、S・M・Sから向かうとなれば車かバイクが欲しい所だ。

自室に立ち寄りS・M・Sの制服を素早く脱ぎ、私服に着替えてから車庫を目指す。

足早に歩き、車庫の扉がある角に差し掛かった時、声が掛かる。

「あれ？ゼノンさん、どこかに行くんですか？」

その声を聞きゼノンはピタッと止まり、振り返る。

「ラムか、どうしたんだ？こんな所で」

そこには先日専属のオペレーターになったラム・ホアの姿。

よくラウンジで一緒に遊ぶのでその時に歳を聞いたらなんと同い年。背やその他が小っこかったのでアルト達と同じ年辺りかと思つたが予想が外れた。

そう考えながらもラムの恰好を見て違和感を覚える。

S・M・S内であるにも関わらず隊服ではなく私服である。

トレードマークであるカタツムリの髪留めはいつも通りだが。

「私はこれから出かけるところです」

ああ、どおりで。

「んじゃ一緒だな、俺も今からシルバームーンに向かうんだ」

「ちょっと遠いですね、何で行くんですか？」

「バイク。無理言っつて俺専用のヤツを作っつて貰ったんだ、その試運転も兼ねて」

ルカに言っつてちょっと無理やり。

見返りとしてエネルギーCAP技術を提供するといったら喜んで引き受けてくれたけどな。

「ふう〜ん……じゃあ、後ろに乗っつていきます」

口に人差し指を当てて少し考える仕草をし、ラムは当たり前のようにそう言っつたのだ。

「は？」

思わず間抜けな声が出てしまう。

「後ろに乗ります、安全運転をお願いします」

「いや、だっつて行く場所違っつたろ？」

「いえ、そもそも私は何処に行くか言っつてませんし」

そう言えば聞いてないな、とゼノンは思った。

「じゃ何処行くんだよ？」

そう聞くと、

「決めてません」

「……ん？」

平然と決まっていなと答えた。

「何処に行くかなんて決めてませんよ。

何処に行こうかなあゝと思っっていたらゼノンさんが来たので。
わざわざ電車に乗らずに済みました」

その答えを聞くと妙に納得してしまった。

何処かに行く、など特に決めないで外に出てブラブラすることはゼ
ノンはよくやっていた。

目的が無いからこそ気の向くままに歩き、街を周り何かを新発見し
たりしなかったり、

只単にのんびりと歩いたり、寧ろゼノンは休日はこちらあるべきだ
と思っっている。

その考えがあるからこそ、ラムの気持ちがよく分かった。

「……そうかい」

そう言つとゼノンは車庫に歩を進める。

「あ、ちょっと！」

ラムはそれを見て、断られたと思つたがゼノンから帰ってきた言葉
でその心配は消え去る。

「さっさと行くぞ、ラム」

背中越しに、そう言ってきた。
その言葉を聞き、ラムは思わずニヤける顔をどうにか抑えながら後に付いていった。

.....

車庫の一角、数台の見たことの無いデザインのバイクが数台並んでいる一番端。

シートの掛かっている一台にゼノンとラムはバイクに近づく。

「これですか？」

「ああ、コイツだ」

と言いながらシートに手を掛け、一気に剥がす。

「おおー、カッコイイじゃないですか！」

姿を見せたのはこの世界に来る前のゼノンの愛車を模した物。

その独特のボディの形から、数十年程前に作られたにも関わらず今でも愛されているバイク。

名を刀KATANAと言う。

元となるのは参型と呼ばれる刀で、今では見ないリトラライト式の車種である。

無論エンジンなどの各パーツは、

マクロス技術でコッチの世界とは比べ物にならない物に仕上がっ

ている。

ついでに言えば、エネルギーはガソリンではなくエコな物に変わっている。

元愛車同様、ボディは黒に青いラインが入り、フレームは深い赤。

二本出しのマフラーはサテンシルバーに塗装されている。

何処か懐かしそうに、そして新しい玩具を手に入れた子供のようにゆっくりとキーを回す。

エンジンが重低音を響かせる。

音は流石に元とは違うが、この音も嫌いじゃないな。と思いながら跨る。

エコな物に変わっているにも関わらず、体に伝わる振動はそう変わらない。

それを体感すると自分の心が興奮しているのが分かる。

まるで子供のようだ、と思いながらもアルト達との約束を思い出しヘルメットを被る。

ラムにもヘルメットを渡し、ラムはそれを被ると軽い身のこなしでゼノンの後部に乗る。

「よし、しっかりと掴まってるよラム」

「はい」

そう言うとラムの手が腹辺りで組まれ、背中に女性特有の柔らかい感触を感じた。

それを感じた瞬間、体が硬直してしまった。

実のところ、ゼノンは女性と付き合ったことが一度も無い。

そしてゼノン自身、誰かを好きになるなんてことが無かった。

そもそも、友達と言える存在が居ない。

小、中、高、大学と進んできたゼノンには友達も居なければ親友なんて呼べる存在も居なかった。

だがクラスメイトと仲が悪かった訳でもない。

自分に恋愛経験など無いのに何故かよく男女問わず相談（主に恋愛）を受けたり、

学校帰りに遊んだり、飲み会に行ったり、家飲みもした。

学校行事には一緒に笑い、泣き合った。

しかし不思議と誰からも連絡など来ないしコチラからもしなかった。携帯電話という最高の連絡手段が有ったにも関わらず。

遊園地の類などは誘われないし、誘おうともしない。お祭りも必ず一人。

寂しいとは思わなかった。悲しくもなければ、なぜ？とも思わなかった。

前置きは長くなったが、要するに背中から抱きつかれるなど慣れていないのである。

泣いた女子を落ち着かせるために抱きしめたことはあるのだが……。

しかし、環境が変われば人も変わるもんだと思う今日この頃。

大人数よりも一人で。の思いが変わった。

アルト達と共に居る方が心が充実している。

一人の時とは気分も何か違う。

心が許せる相手が居るだけでこうも違うものかと実感している。

同時に、居なくなった時の寂しさと悪感が脳裏に浮かぶ。

「ゼノンさん？どうしたんですか？」

「ん？なんでもない、やっぱりバイクは良いなと思っていただけさ」

しかし、何処ぞのギャルゲの主人公みたいな変なりアクションなど起こさない。

良いのか悪いのか、ゼノンは即座に頭を「別に」切り替えられる。

「んじゃ、行くぜ」

「はい」

そう確認すると、ゼノンは刀を発進させた。

.....

「「おめでと〜、ランカちゃん!!」」

ミシエル、ルカ、ナナセからの祝いの言葉にランカは笑顔で応える。

「ありがとう、皆のおかげだよ」

「ランカさん、これで夢に一步近づいたんです！」

私全力で応援します、目指せ銀河の歌姫！打倒シェリルですッ!!」

拳を握り締め、力説するナナセ。

その横で、誰にも気づかれずランカは微妙な表情をしていた。

打倒シェリルの言葉を聞いた瞬間、何とも言えない感情が巡っていた。

「俺も、応援するよランカちゃん。あんな素敵な歌を聞かされちゃあね。

つまり、ファン一号ってことで」

そんな感情を巡らせているランカの表情に、
珍しく気がづかずにミシエルが肩に手を回してフアン一号宣言をす
る。

しかし、その宣言にナナセが食いつく。

「駄目です、一号は私です！」

「じゃあ二号」

そこは別に拘ってないのでミシエルは右手でピースを作りながら言
う。

「僕は三号になります！」

続いてルカも三号の宣言。

それを聞いて少々恥ずかしかったのか、ランカは顔を赤くし伏せて
しまう。

同時に全員が期待の籠もった目でアルトを見る。

少し遅れてアルトのことを思い出したランカも顔を上げアルトを見
る。

「わ、わかってる。俺も勿論応援するさ。

ランカにも最初に言っただろ？」

それを聞き満足したのか、全員がニヤける。

と、そこで後ろから声がかかる。

「んじゃ俺は五号かな」

全員が振り返る中、アルトは軽く溜息を吐きながら背後の人物に声

を掛ける。

「やっと来たな。遅いぞ、ゼノン」

「悪いな、少し迷った」

そこには、苦笑いを浮かべたゼノンの姿。

「ランカちゃん、改めておめでとう」

向き直り、ゼノンは改めてランカに伝える。

「ゼノン君！

……うん、ありがとう」

ランカは嬉し恥ずかしそうに顔を赤に染めながら笑顔で返す。

ゼノンも笑顔で返す。

その後ゼノンはナナセに軽く自己紹介をし、ランカ・リーファンク
ラブ入りを果たす。

名物コーヒーを飲みながら話に花を咲かせ、気づけば夜。

再び会おうと約束し、その日は終わった。

そこから少し、時は進む。

束の間の平和（後書き）

特に無し。

次にアルトの訓練の様子を書いて、
TVだとバイバイ・シェリル辺り。虚空歌姫という終盤に入ります。

アドバイス・感想等まっています。

ではまた次回。

一に訓練、二に訓練、三四はランカで五に悪ノリ（前書き）

語呂悪いな。

どうも、おはこんばんちわ。

少し遅れてしまいましたが、五月内に更新できました。

ごぞ。

一に訓練、二に訓練、三四はランカで五に悪ノリ

アルトが駆るVF-25が漆黒の宇宙を駆ける。
しかし、ソレを上回る速度でゼノンのF91が迫る。

「チイツ！」

ソレを確認するとアルトは軽く舌打ちし、マイクロミサイルを後方に放つ。

二十程のミサイルが迫る。

迎撃する隙を狙おうとその場からバトロイドに変形しながら上昇し、ガンポッドを構える。

しかし予想外の事が起こる。

なんとゼノンはミサイルとミサイルとの間、

僅かな隙間に一気に潜り込むと同時にビームサーベルで手近な物を斬り捨て誘爆させる。

そしてさらにスラスタから青い粒子を放ち、一気にアルト機に肉迫する。

「なツんだとツ!?!」

「とつた」

その声と共にモニターに映るのは撃墜の文字。

それが目に入ると同時にアルトは悔しさの余り、声にならない声を上げる。

「ーーーーッ!?!」

プシューと空気の抜ける音がし、背後の扉が開く。

「お疲れ、アルト姫」

「ミシエル……その呼び方は止める」

アルトは扉から顔を出したミシエルを睨みながらシュミレーターを出る。

「クソツ！手も足も出ないなんて！！」

「そう怒鳴るな、アルト。」

隊長ですら墜とされたんだ、アレだけ保っただけでも十分さ」

そののを聞くな否や、アルトは信じられないという表情でミシエルに聞く。

「冗談だろ！？オズマ隊長まで？」

「マジだよ。」

途中まではいい勝負だったんだが、ゼノンがあつたファンネルとかいうのを使い始めたらあっという間に墜とされたんだよ」

「ファンネルつてたしか……」

「ファンネルはF91に搭載されている、サイコミュと呼ばれる特殊な脳波コントロールで操作する無線誘導兵器です」

言いかけたアルトの背後から声が掛かる。

「ルカか、お疲れ」

「お疲れ様です、アルト先輩」

挨拶を交わすアルトとルカ、それが終わるのを待ってミシエルが疑問を抱く。

「ルカ、アレは自動じゃなくて脳波コントロールでやってたのかわかるとも戦闘中」

「はい、通常の攻撃を行いながら脳波で全く別の敵、それも複数に攻撃をして墜とめています」

「すさまじいな……」

自分ではまず無理だな、と思うミシエル。
スナイパーのという立場上、単独行動が多い。

いちいち味方に着いて行くのではなく敵の視覚外、感知外からの攻撃の為、

少し離れた身を隠せる場所で敵を一発で沈めるために、神経を極限まで研ぎ澄まさなければならぬ。

そういった状況では良く言えば集中している、悪く言えばし過ぎている為周りが見えにくい。

もし、ファンネルが自動ならそういった状況で後ろを取られないと考えたのである。

「……考えていたら、ミシエル」

「ゼノン、人の頭の中でも見えているのか？」

溜息を吐きながら、頭の中の考えをそのまま言われたミシエルはゼノンを睨む。

「そう睨むなよ、俺はどこぞの超能力者じゃないんだから」

「似たようなモンだろ？」

「……どうだろうな。自分でもよくは分からんさ。

それよりもだ、お前にぴったしの武装があるんだが……聞くか？」

「へえ、是非お願いしたいね」

武装の話題にピクリと反応したルカも興味津々だ。

「ファンネルとは違って有線なんだが、インコムという武装がある。平たい円柱形をしててな、内部に誘導用のワイヤーが巻かれてて、これを繰り出しつつ内蔵推進器によるパルス状のロケット推進を行う事で空間に展開するんだ。

ああ、ワイヤーは弛みが発生しない様に常に一定の張力が掛けられていて、

方向変換の際にはリレーインコム……だっけな、それが中継器をワイヤー上に射出して、本体のベクトル変更をするんだ。

あ、回収はワイヤーの巻取りな。んでこいつは、パイロットの特別な空間認識能力に依存する事が無い。

ファンネルと同じオールレンジ攻撃に近い戦法を実現が可能となっているんだ。

けどコンピュータによるアシストがあってもファンネルほどの複雑な攻撃は不可能だからな」

と、説明する。

「なるほど、有線ですか……けど高速で動くバルキリーには向かないですね」

至極最も。

「ああ、だからこそスナイパーであるミシエルに話したんだ」

「ふむ……魅力的な武装だが、悪いなゼノン。止めとくよ」

「そうか。ま、それだけ仲間を信頼しているんならいいんじゃないか」

それを聞いたミシエルは少し驚いた顔をしたが、すぐに笑い、ゼノンも笑い返す。

「さてアルト、休憩は済んだ。

次はバジユラ戦十本だ、気張れよ」

「マジかよ!？」

せめてもう少し……」

「駄々捏ねてるとEX-ギアで格納庫十週追加だぞ。

あ、撃墜されたら二十週だ」

「クソツ!!--ミシエル……憶えてろよ!!--」

そう言いながらアルトは再びシュミレーターに入っていた。

.....

その頃、ランカはというと所謂下済みの真つ最中である。

デパ地下で世にも珍しい納豆のコスチュームを着て、
商品の宣伝歌を歌ったり……

『.....』

工事現場で水着で歌ったり……

『.....』

深・秋葉原。読みはディープ・アキハバラ。

フロンティア船団の地下に広がっている日本の電気街、秋葉原を再現した街である。

分かっていると思うが、基になっている秋葉原と同じくオタクの聖地でもある。

そんな中でランカは子供の心を持った大人達に相手に、

大人気のダイナム超合金の歌をバルキリーコスを着て店頭で歌った
り……

『.....』

その可愛らしい容姿と歌、一生懸命にこなす姿勢が評価され、
達磨ゼミナールというフロンティア船団内では評判のゼミの歌を歌
ったり……

『……………』

ランカは少しずつではあるが、確実に、一步一步スターへの道を登
っている。

……………

「ぬぐぐ……!!」

ガシャン、と格納庫にアルトの踏ん張る声と重い金属音が響く。
あの子のバジユラ戦十本で惜しくも九戦目で撃墜してしまい、今現
在に至っている。

EX-ギアの主電源を入れずに歩行。

電源が入っていれば羽のように軽く動かせるのだが、
それが入っていないため数十kgの重さが体全体に重く押し掛かる。
筋トレ、体力上昇、根性を鍛えるのにはもってこいなのだが……

「うおおわッ!？」

叫びと大きな音と共に、アルトは床に倒れる。

そう、一度倒れるとその重さ故なかなか起き上がれないのが難点で

ある。

「ぐ、おおお……」

重い手足をどうにか動かし、起き上がるうとするが突如背中から押さえつけられる。

「くっ……足を退ける、ミシエル！」

「まあそう言うなよ。かなり辛いが俺も経験済みだから安心しな」

「クソッ！うおおお……！！！」

そう言われてはアルトも文句は言えない。

渾身の力を込めてどうにか起き上がる。

それだけで息は絶え絶えだ。

「まだまだだな、アルト。」

ほらゼノンを見てみる、お前と同じ条件でバク宙してるぞ」

指差された方向にアルトは目を向けると思わず自分の目を疑った。

「嘘だろ……」

そこには自分と同じく電源を入れていない状態のEX-ギアを纏いながら、

汗一つかかずにピョンピョンと飛び跳ねるゼノンの姿。

「フッ！ハッ！ハアアアアッ……！！！」

そして思いっきり飛び跳ね、空中で見事な三回転捻りを行い華麗に着地した。
それを脇で見ていたボビーとオペ三人娘からは10・0の得点がかかる。

「す、凄いですぜノンさん！」

「フハハ……まだまだいけるぜ？」

とルカとやり取りをしている。

それを見てアルトとミシエルはただ溜息しか出なかった。

「ならば……見るおおおおッ！！」

ゼノンはある構えを取った。

「「あ、あれはっ！！」」

「アルト君、ルカ君、あれが何の構えか知ってるの？」

露骨な反応を見せたアルトとルカにラムが思わず聞く。

「ええ、あれはある動物の猛々しい姿を模した構えです」

「動物？」

「そう、大空の覇者……鷹を模している。

その難しさから今ではその構えを取ることすら出来ない幻の構え。
その名も……」

「荒ぶる鷹のポーズッ！！！！」

後ろに雷が落つこちそんなカットだろうか。
秀困氣的に。

「そ、そんなに凄い構えなんだ……あれ」

「ええ、まさか別世界のゼノンさんが知っていて出来るとは思いませんでした」

そう話しているとゼノンが次の行動に移る。

「超級ッ！霸王ッ！！電影だあああんッ！！！！」

顔はそのまま体だけ回転させ、物凄い勢いでスクラップを粉碎した。

「……ええええええええ！！！！」

そして原理は分からないがそのまま空中へ上昇し、

「爆発ッ！！！！」

空中でまた別の構えと共にそう叫ぶと、スクラップが爆発した。

「……す、すげええええええええ！！！！」

そんな訓練？の日々の「コマ」。

一に訓練、二に訓練、三四はランカで五に悪ノリ（後書き）

書いてみたかっただけです。

後悔？するわけないじゃないですか。ハッハッハ。

アドバイス・感想等待着っています。

次回、本編に戻ります。

再びの再会（前書き）

お久しぶりです。

間を空けてしまい申し訳ない。

小試験やら何やらでなかなか時間が思うように取れませんでした。かと言って試験が終わった訳ではなく、来週には期末があります。

そんな時に書いてていいの！？とお思いでしょうが、いいんです。こういう時の方が何故か進むんですwwww

どうぞ。

再びの再会

アルトの訓練が一段落着いての夜の帰り道。

アルト、ミシエル、ルカの三人とS・M・Sから出てすぐの電柱に照らされた人影を見つける。

見覚えのあるその姿。

「噂をすれば……娘」

ミシエルの眩きと同時にアルトは視線をそちらに移す。

「あ……」

街灯に背を預けているランカの姿を見て、

まさかこんな所で会うとは思っていなかったのか、アルトは呆けてしまう。

「まったくこの色男」

少々ふざけた調子でミシエルはアルトの肩に手を置く。

「な、なんだよ!」

アルトはその態度に若干のイラつきを憶えるが、ミシエルの雰囲気が即座に変わり、

「誤解を解くなら今しかないぞ。

……会ってないんだろ、あれから」

「ッ！……ミシエル」

その言葉を聴き、アルトはランカの方を再び見る。ランカも伏せていた顔を上げ、コチラを少し見たらすぐに方向を変え街の方に歩き出してしまった。

アルトはその行動に少し焦りすぐに追いかけてみようかと思ったが、ミシエル達の存在を思い出す。

無言のアイコンタクト。

『さつさと追いかける』まあ、簡単に言うところだ。

そうしてアルトはランカを追いかけていった。

それを見送ると、今度はミシエルがゼノンに話しかける。

「……で、ゼノン」

「ん？」

「俺の見解ではお前にも好意を持っているように見えるんだが……どうなんだ？」

「ランカが、か？」

「そう」

「……」

どうなんだろうな、実際。

確かに好意は持たれているだろうが……好きとは違う気がするんだよな。

こう、強さに対する憧れとか恩人に対する賛美に近い感じがする。

そうミシエルに言う。

「……そうだな、とは言っても俺もよくは分からないしな。ランカちゃんのお前を見る目はゼノンの言う事は正しいと思うし、間違っているとも思う」

「そうですね……なんだか天秤みたいですね」

ルカもソレに気づいていたのか、そんなことを言う。

「天秤……か」

確かにぴったしかな。

そう呟いて、ゼノン、ミシエル、ルカは帰路についた。

.....

そんな事があつた次の日の昼間。

オズマ隊長からの突然の呼び出し。

ゼノンは街中のオズマの車の中に居た。

「スパイ疑惑、ですか隊長」

「そうだ」

そう言いながらモニターを操作し、情報を見せてきた。

「この二人には近づくな。」

この……シエリル・ノームとそのマネージャー、グレイス・オコナーに」

そこに映ったのは相変わらずの美しさのシエリル・ノームと、眼鏡をかけたこれまた美人の青髪の女性。

「……理由を聞いても？」

「考えてみる、シエリルが来館してたった数日、ライブ当日にバジユラが襲ってきたこと。」

そして何故、銀河の妖精がアルトのような一介のパイロット候補生に接触してきたのか。

アルトはお前に助けられた時に無くしたイヤリングを捜索しただけと言ったが……、

それが……作戦だとしたら」

未だに予想の範囲内、か。

しかし何か違う感じがするな。

あの時、アルトと一緒にいた彼女の笑顔はどう見てもそうは感じられなかった。

まあ、マネージャーの方は会ったことも無いから何を考えているか分からんが。

それと、話の内容から察するにアルトを変に強調してるな。

何故だ？アルトになにかあるのか？

……あえて聞いてみるか。

「何故、アルトなんです？」

「……バジュラの研究者を親に持ち、
ガリア4唯一の生き残りであるランカの……とても近い存在だからだとしたら」

なるほど。

資料では生き残りは居ないと載っていたが、まさか生き残りが居たとは。

しかもそれがランカちゃんか。こういうのを運命の巡り合わせと言うのかな。

嫌な運命だが、な。

「そして、シエリル・ノームはランカの残された記憶の歌『アイモ』を歌えたようだ」

アルトから聞いたことがある。

ランカの歌う『アイモ』という歌はとても綺麗だった、とかなんとか。

しかし『アイモ』か、なんだか不思議な響きだな。

しかし……普通なら完璧に疑いの余地有りだが、どうもな。

違う。そう勘が告げている。そう感じる。

NTとしての直感か、もとからの第六感か。

ゼノンは何か引つかかるモノを感じられずにはいらなかった。

「もし、奴らがランカに指一本触れようとするならば、実力を持ってこれを阻止せよ！」

オズマの疑いの余地無し、という気迫の籠った目を見たゼノンは心の中で軽く溜息を吐いた。

妹、ランカの事になるとどうしても熱くなるのはオズマの悪い……癖だ。

だが家族として当然。

悪くないといえは悪くないのだが、いかんせん視野が狭くなっているのはいがめない。

「了解」

さて……どうしたもんかね。

そう言い終わると同時にゼノンはドアに手をかけ、オズマの車を降りて街に歩いていった。

- - - - -

気分転換にと未だにフロンティア散策を中途半端で切り上げていたので、

オズマと別れた後は誰にも邪魔されずにフロンティアを堪能した。帰路についたのは夜、空には無限の星々が輝く。

自分の部屋に着いたのは22時を過ぎた頃か。

休憩し風呂を済ませて、ふと机の上のケータイを見るとメッセージ有りの表示。

ゼノンは誰だろうか、と思い再生するとソレはランカからだった。

『ピー……あ、ゼノン君？なんだか眠れなくて。

えと、ゴメンねいきなり……ビックリしたよね。

もし良かったらグリフィスパークに、来て……くれるかな。
ちよつと気分転換に付き合ってほしいな、なんて。
じゃ、また……ね？」

メッセージはこれで終了。

ゼノンは電源ボタンを押して画面を待ち受けに戻す。
視線を移動させ時計を確認。

「メッセージからまだそんなに経ってない……か。
火照りを冷ますには丁度いい、かな」

黒のYシャツ一枚を着て腕を捲くり、靴を履き玄関を閉め、
そのまま跳躍しグリフィスパークへと向かった。

- - - - -

道中特に何も無く、グリフィスパークに到着し階段を上ると人影が
見えた。

ゼノンはランカが思ったより早く着いていたんだなと思い夜の闇で
姿は見えないが、
時間も時間だけあって他の人は考えられないと思い、声をかける。

「ランカちゃん？」

向こうも気づいたのか、ほぼ同時に声をかけた。

「アルト!？」

ゼノンの前に現れたのはあのシェリル・ノームだった。

「……あれ?」

お互い予想外の人物が居たのだろう。

間抜けな疑問の声をあげてしまう。

「えっと……お久しぶり、かな? 銀河の妖精さん」

そう言いながらも、ゼノンは自分のことを覚えていなかったらどうしようか?

と思ったがそんなことは杞憂に終わった。

「あなたは……あの時助けてくれたガンダムとかいうののパイロット……」

良かった、憶えていてくれたみたいで。

そう思いほっ、と心の中で息を吐く。

「で、いったいどうしたんだ? こんな時間に一人で」

「待ち合わせよ、アルトと」

どことなく素っ気無いように答えるシェリル。

「アルトと? ああ、イヤリングの件か」

「ちょ、なんでアンタが知ってんのよ!」

イヤリングという単語に反応するシェリル。

このことはアルト以外には話していない筈なのに。

「俺も搜索を手伝ったからな、この前」

「ふん。で、見つかったの？」

ああ、だからか。

と思いながらシェリルはイヤリングの安否を確かめる。

「いや、そんな時は見つからなかった」

「ええっ!？」

一瞬で絶望に染まるシェリル。

「だが、安心しろ。今日格納庫で見つけたらしいから」

「そう……よかった」

そう聞くと心底安心したのか、盛大に溜息を吐いた。

「あ、そうだ。アンタ確か……ゼノンだったかしら？」

「ああ、ゼノン・グレイブだが……どうした？」

「あの時のお礼をね、先に渡しておこうと思って」

「ごそごそと長財布を取り出しチケットを取り出した。

「特等席よ。こんなサービス、滅多にしないんだからね」

と言い、惚れ惚れするような笑みでチケットを差し出した。ゼノンは一瞬見とれてしまった。その笑みに。が即座に元に戻り、チケットを受け取る。

「……確かに、受け取った。当日は楽しませてもらうぜ」

「渡したからね、絶対来なさいよ」

シエリルは人差し指をコチラに向けて言った。

「それはそうと、どうしてアンタはここに？」

「ん？ランカに相談があるって呼ばれてて、どうやら思ったよりも早く着いたみたいだな」

「ふうん……そうなんだ。」

でも丁度良かったわ、ランカちゃんにもチケット渡したかったし。私もアルトがまだ来そうにないから、どう？座って話さない？」

「そうだな、立ってるのもな。座るか」

ゼノンも立ったまま話すのもどうかと思っていたところだったので同意。

近くのベンチに少々の距離を置いて座る。

「いい風ね」

「ああ」

座ってから暫く星を眺めていると、心地よい風が通る。

「ねえ、一つ質問があるんだけど」

「なんだ？」

ゼノンはどうせアルト関係の事だろうと思い、最近のアルトの様子を頭に浮かべた。

がしかし、シエリルの口から出た質問は思いもよらないものだった。

「ゼノン、アンタ何者？」

再びの再会（後書き）

それにしても暑いですね。

大学には毎日チャリ通なのでなかなか死ねますよ。
背中なんか……。

アドバイス、感想等まっています。

次回、今月中には頑張りたいです。

問い（前書き）

申し訳無い。

7月中に、とか言いながら8月になってしまった。

これと言って言い訳は無いです。

あえて言つのなら、夏の暑さでしょうか。

どうぞ。

問い

「アンタ何者？」

静かな夜の中、シェリル・ノームその言葉は確かにゼノンの耳に入った。

まさかの問いに、ゼノンの頭は一瞬フリーズする。するも、どうにか瞬時に落ち着かせその意味を問う。

「どづいつ……ことだ？」

「どうもこうもないわよ、ガンダムなんてあんなモノ見たことないわ。

それに傭兵だってんならアンタの腕で名が売れてないのはおかしいし、私の耳に入らないのは変よ。

それで考えたのは……突拍子もないけど異世界から来たんじゃないかって事」

「……!!」

まいったな、なんて勘の良い子だ。

一、二回会ってアルトから聞いたであろう俺に関する情報だけでココまで行き着くなんて。

流星は銀河の妖精ってことか。それともただ単純に女の勘ってやつか？

顔には決して出さず驚愕するゼノン。

それもそうだ、まさか特に親しい訳でも何回も会った訳でもなければ大した会話もしていない。

それなのに、勘とはいえこつも的確に自身の事を言い当てられるとは思ってもいなかった。

「で、どうなのよ。ゼノン」

「ノーコメントで」

「恋人と一緒に居るとこ撮られたアイドルじゃないんだから。ほら、さっさと白状しなさい」

若干離れて座っている位置から腰を浮かせ、ゼノンに近づき詰め寄るシェリル。

ゼノンの鼻には風と共に漂ってきた女性特有の香りが神経を刺激する。

それと同時に今まで遠くから見てもその美しさは分かっていたが、彼女、シェリルの姿を生でこつ見るとより一層美しさが際立って見えた。

しかしゼノンのノーコメントの返しにちょっと不機嫌になったのか、少々膨れっ面になっている彼女はひどく可愛く見えた。

ゼノンは普段は年よりは大人びて見える彼女のイメージを良い意味で改めて認識した。

「なによ、私がこつやっってお願ひしてるんだからちよつと位いいじゃない」

元々話すのには何も抵抗は無いのだが、まさかシェリルに話すとは思わなかったな。

「……まあ、いいか」

「フフン、よろしい」

何故そこで威張るようなポーズをとるのかはわからんが。

「そうだな、どこら辺から話せばいいかな」

「どこからでもいいわよ、異世界の話なんてワクワクするじゃない」

まるで英雄の昔話を聞く子供だな。

目をキラキラさせて顔は嬉しそうな笑みを浮かべて。

「まず、俺の元居た世界は異世界だが平行世界とも言っ」

「ああ、もしもの世界ね」

「その認識でいいぜ。」

簡単に言えば人間同士で争う世界だな」

「じゃあゼントラーディはいないのね」

「ああ、それに……」

.....

「……そう」

数分で話は終わった。U・C・の世界の話が。
悲しき人の歴史。

シエリルはもしゼントラーディという人類共通の敵が来なければ、
居なければ、

私達の世界も未だに人間同士が争うゼノンの世界のようになってい
たかもしれない。

そう思うとシエリルは背筋に嫌なモノを感じた。

人間同士、という点ではこの世界でも無いとは無い。

とは言うものの、コロニーレーザーやソーラ・レイなどという大量
殺戮破壊兵器、

聞いただけで吐き気がするような物は少なくとも彼女の知るこの世
界には無い。

「そう気落ちするな」

人間同士の戦いの話が辛く、悲しく感じたのだろう。

シエリル・ノームの感情は何とも言えない悲しみで満ちていた。
表情からも分かる程に。

ソレを見て、ゼノンはシエリルに声を掛けた。

「でも……」

「仕方が無い、そう言ってしまうえばそれで解決しまつんだよ。

……この言葉は卑怯だ。だが、悔しいけど同時に真理に近い言葉な
んだ」

「……人の歴史が物語っているから？」

「ああ」

悲しいかな、その言葉で片付いてしまうのが。

……そう。

U・C・世界では知らぬ者は居ない伝説のニュータイプの二人。宿命で結ばれたライバル同士最後の戦い。

小惑星アクシズ落としを決行し、ネオ・ジオンを率い、重力に魂を縛られた地球人類の粛清を謳った赤い彗星、シャア・アズナブル。

しかしその実は、長年のライバルとの決着の為にだけに整えた舞台。赤い彗星のライバル、一年戦争と呼ばれる戦いに終止符を打ったMSガンダムのパイロットの一人。

その名は白き流星。後世にまで語り告げられる伝説のニュータイプ。彼は最後まで人の心の光りを信じていた。

ガンダムを、サイコ・フレームを通し、その心は敵味方関係無く彼らの心に響いた。

そして、奇跡を起こした。ロンド・ベルの決死の破砕作業によって半分に割れたアクシズ同士が、

優しさを放つ虹色のように輝く緑の光りによって引かれ合い、大気圏に突入していた片方を再び宇宙空間へと戻したのだ。

地球の周りにはオーロラがリング状に輝き、確かに人々は己の心に光りを見た。

見たんだ。見た筈なんだ。

彼が、アイツが……アムロ・レイがその命を賭して人々に可能性を見せた。

そして、託した。

全ての人が本来持つ、優しき心の光りを。

なのに……！！

「なのに……なにも変わらなかった」

「……………」

そしてLa+戦争、マフティーの動乱、
オールズ・モビルズ戦役、コスモ・バビロニア建国戦争、
木星戦役、神の雷計画、ザンスカール戦争。
こんなに戦争が、戦いがあった。
多くの人々が命を賭け、無残とは言わない。
愛する者の為、信じる者の為、己の正義の為、人々の為に散って
いった。

「…………… 人類の歴史は戦争の歴史。
平和とは、次の戦争に備える期間」

「……………」

シエリルは、何も喋れなかった。
ゼノンの雰囲気、その口から出る悲しすぎる歴史に。

「悲しい言葉だよな。
平和な明日を信じて、戦って、散っていった命達になんて言え
ばいいんだろう。
その命を賭して人の心の光を、その可能性を見せて、託したアム
ロに……………」

「……………ゼノン」

シエリルの眼には今のゼノンが酷く弱弱しく見えた。

「俺は……………」

星間戦争、絶滅するかもしれない窮地に立ちながらも決して諦めず、己を信じ、他を信じ、そして見つけ出した『歌』という最高の戦争の解決方法。

まるで夢物語だ。だが、現実。

そして今では手を取り合い、共に生きている。

元は敵同士、違う種族同士が。

だからか、この醜い憎悪にも嫉妬にも似た妙な感情。

ああ、そうか……

「俺は、この世界の人々が……羨ましかったんだ」

「……」

グスンと鼻を嚼る音に俯いていた顔が上がる。

「うおッ！シエリル、こんな話で泣くなよ!？」

「だって……だってえ……」

えぐえぐと泣いているシエリルを見て焦るゼノン。

「ほら、ハンカチ貸してやるから……」

「うう〜……」

貸したハンカチで涙を拭い、チーンと鼻をかんだ。

「（ハンカチでかむなよ……）」

そこから二・三分経っただろうか。

落ち着きを取り戻したシエリルは一度深呼吸をし、

「はぁ………今のは忘れなさい」

「………なんで」

「いいから」

「なんd」

「い・い・か・ら!!」

「Yes」

顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに、しかし後ろの黒いオーラに嫌なモノを感じ肯定。

「まったく………どうしてくれるのよ」

ポソツと何かを呟いたがゼノンの耳には届かない。

「ん？なんか言ったか？」

「なんでもない!!」

「………んな怒んなよ」

暫くの沈黙。

「………」

「……」

沈黙。

「（なんだこの空気。気まずい。俺か？俺の話が原因か？）」

「……」

未だに何も話さない、否話せない二人が微妙な空気を包む。それに痺れを切らしたのはゼノンであった。座っているベンチを立ち上がり、

「何か飲み物買ってくる。妖精さんは何が所望だ？」

「……」

なにか呟いたが小声過ぎて全く聞こえない。思わず聞き返すゼノン。

「ん？」

「私のことはシェリルって呼びなさい、異論は認めないわ
しっかりと眼を見て、そう言った。

「……へいへい、わかったよ。銀河の妖精さん」

「シ・エ・リ・ル……！」

「怒鳴んなし。」

……シエリルは何か飲むか？」

お手上げのポーズを取りながら聞く。

「ん〜、カフェ・オレをお願い」

それに満足したか、シエリルは笑顔でそう言った。

「りょ〜かい、んじゃ五分で戻ってくる」

「待ってるわ」

そう言っただけ来た時とはまた別の方へ跳躍し、グリフィスパークを出た。

.....

何故に公園なのに近くに自販機の一つも無いか。

口には出さずともそう思いながら一番近くのコンビニでカフェ・オレとカルスを買う。

流星はカピス。世界の壁を超えてさえその人気は揺らがない。

ルピス is ジャステイス。

「ん？……光？」

ビルを跳躍し、グリフィスパークが目前に迫った時、光が見えた。

「なんだ？この……妙な感じは」

妙な感じ。

とは言うものの怒りや憎しみなどの不の感情ではない。

だが喜びとも違う。妙なのだ。

そして光を追いかけている複数の人影を見つける。

一つはゼノンの帰りを待っているシエリル、そして待ち合わせをしているランカ、さらに……

「アルトツ！？なにを！？」

ランカの近くに居たシエリルをいきなり突き飛ばしたのだ。

そしてランカを守るように立つアルト。

それを見てゼノンはアルトがシエリルのスパイ容疑を真に受けたのではないか、と結論付けた。

「馬鹿なことをツ！」

一気に足に力を込め、アルト達とシエリルの間に降りる。

「ツ！！ゼノン！？」

「はやまるな、アルト！！！」

「でも、シエリルはランカを！」

やはりか、と思う。

「落ち着け、アルト」

「でもッ！」

駄目だ。アルトは周りが見えていない。
なら……

「……歯あ食いしばれ」

「何、ぐはぁ！？」

鈍い音と共にアルトが殴り飛ばされる。

「アルト！？」

「アルト君！？」

後ろで傍観していた二人も、いきなりの出来事に思わず声を上げる。

「グ……何を」

アルトは苦悶の声を漏らしながら左手で頬を押さえ立ち上がる。

「修正だ」

U・C・世界では当たり前だ。

「だからって、殴ることないだろ……」

「甘えたこと抜かすな。……落ち着いたか？」

「ああ、お前へのイライラも芽生えたがな」

いつの間にやら、雨がかなりの勢いで降っている。

「そいつは結構。」

……全員ずぶ濡れだな。アルト、お前はランカを送ってやれ。俺はシェリルを送る」

そう言い、未だに地面に座っているシェリルに手を伸ばす。

「立てるか？」

「え、ええ。ありがとう」

手を引き、転がっている右のサンダルを拾い近くに置く。

「あ、あの……ゼノン、くん」

声が掛かり、振り向く。

「大丈夫ランカちゃん、約束は忘れてない。」

だが今回は無しだ、近々コツチから連絡するから待っていてくれるかい？」

「……うん、待ってる」

なんとも可愛らしく頷いてくれた。

「よし。それとアルト、送った後でいいから俺ん家に来い」

「ああ、わかってる」

確認したところで、ゼノンはシエリルをひよいとお姫様だっこする。

「ちょよ、ちょよと!」

「我慢してくれ、アルトじゃないのには我慢してもらうしかないが……

代わりと言っちゃ難だが雨の日の半空中散歩をプレゼントしよう」

「ちょよと何を訳わかんないことを……キヤア!」

言ってる途中だが、跳躍。

「掴まってるよ」

「ちょよ、ちょよと大丈夫なんでしょうね!」

「問題無い」

そう言い、シエリルを抱えたままビルを飛び移り彼女の泊まっているホテルを指摘した。

その中、ゼノンはランカに抱えられた緑色の生物について思考していた。

アレはなんだろうか。

非常にバジユラに似た感覚を感じたのだが、似ているだけで疑うのもどうかと思う。

そもそも、その可愛らしい容姿からあのバジユラとの関連性は想像

できない。

考えすぎか？

ゼノンはとりあえず今はその考えを隅に置き、ビルを跳躍した。

問い（後書き）

動き無し……かな？

次回はできれば虚空歌姫の後編の戦闘に入る手前……
までどうにかいきたい。というかちよつと飛ばしても逝く。

あと、明日から少しづつですが一話〱最新話まで、
内容の書き加え、改訂する予定です。

アドバイス・感想等待っています。
ではまた次回。

出撃（前書き）

マジ遅くなってすみません。

色々とお本番あったり、今週も本番あったり……
すみません、言い訳ですね。

どうぞ。

出撃

あの後、雨の日の半空中散歩を満喫？すること数分。

シエリルを無事ホテルに届け玄関で待っていたマネージャーのグレイスさんに渡した。

その際にせめて頭だけでも拭いていきなさいと二人に言われるも、アルトが暫くしたら家に来るのでと断ったら、また今度お茶でもしましょう、ということとなった。

んで、アルトにはもうちょい冷静に判断しろとお灸を据えた。

色々とはしよったが、これでこの日は終了。だが0時などとうの昔に過ぎているが。

風呂に入り直し寝ようとしたその時、感覚が走り抜けた。

「なんだ？いきなり騒がしくなった……？」

漠然としか感じられないが、先ほどまで静かだった宇宙の空気が突然変わった。

「嫌な感覚だな……。なんなんだ？」

恐らくは何処かで戦いが発生したのだろう。

数え切れない程の意思の爆発らしきモノを感じる。

そこまではいい。

その後ろ、性質の悪い何か。悪意のような感覚が見え隠れしている。ゼノンはそれが非常に不愉快に感じられた。

吐き気がする。

ハッキリとしない、このモヤモヤとしたモノに思わず舌を打つ。

だがここで眠気と疲れがゼノンを容赦無く襲う。

既に3時を半分過ぎ雨に濡れた所為もあるだろう、一気に押し掛か

る。

「クソツ……、明日朝一で確認とる、か」

悪態を吐きながら、ゼノンは睡魔に身を委ねた。

- - - - -

「可笑しなモノを見たわね」

シエリル・ノームの泊まっているホテルの一室。

彼女のマネージャー、グレイス・オコナーはそう呟いた。

”上”に報告を終え、彼に命令を出し、深い息を吐きながらソファに座った。

既に用意されているグラスに入ったワインを一口飲み、また息を吐く。

「どうして、あんなところで宇宙の映像なんかが見えたのかしら」

彼……ゼノン・グレイブに自己紹介の過程で握手をした時に見えた宇宙。

最初はメモリーの誤作動かと思いきや、チェックをしたが異常など見当たらなかった。

それから全身くまなくやったが結果は同じ。

「なにかしらね。悪い気はしなかったけど」

再びワインを口に運びながら、彼の資料を再び目の前に映す。資料、とは言っても異世界人である彼には詳細な資料がない。今彼女が見ているのは諜報部員達が探偵の真似で集めた不確かなモノでしかないが。

「搭乗機は新型の試験機、ガンダムF91。これのデータは回覧は不可能だったわね。それでこれ、ねえ。」

曰く……

彼はエスパーである。

エスパーではなくNTというらしい。

身体能力が半端じゃない。

パイロットとしての腕も半端じゃない。

趣味はバイクでツーリング。

女性関係は特に無し。

「……気になるわね。

エスパー、要は超能力者ってことかしら？でもNTなんて聞いたことないわね。

……調べてみようかしら」

けど、それは明日のライブが終わってからね。
と呟き、彼女はベッドに身を投げた。

ニュータイプ
NT。

この世界には存在しない筈の能力を持った人間の一つの可能性。
だが、以外や以外。
彼女は辿り着く。

NTという言葉に。

その意味に。

けどそれは、少し先の話。

.....

次の日の昼過ぎ。

思ったより良く眠れた。いや、寝すぎた。そう思いながら欠伸と伸びを一回。

そのまま顔を洗うより早く、S・M・Sに確認を取るも何も無しと言われる。

そんな馬鹿な。明らかに感じるこの感覚は間違い無く戦闘時のモノ。そして夜に感じられた『性質の悪い何か』は相当薄れている。

どういうことだ？

別の行動に移ったか、興味が無くなった？

まあ、今はそれを考えてもしようがない。

一旦、ソレのことは頭の片隅に置き艦長に連絡を取る。が、出ない。寝てるのか？

出ないもんはしょうがない。

ランカちゃんにもついでに連絡したらなんとオズマ隊長に自宅謹慎を喰らったらしい。

隊長……いくらなんでも。

だが、用心に越したことはないか。

この妙な感覚、胸騒ぎの中ではそう思えてしまう。

「アルトも……出ないな」

鳴らしても出ない。

なんだ？イジメか？S・M・S総出でイジメか？

とまあ、アホな考えは置いといて。

「シエリルのライブは確か今日の夜か。

差し入れでも持ってってやるか」

なにがいいだろうか。無難に甘いものでも買ってってやるか。

そう思いながら、ゼノンは身支度を整え始めた。

自慢の身体能力を使い、

数量限定『超銀河鯛焼き』Big Ver. を買い、シエリルの元へと向かう。

しかし流石はマクロス。

特殊製法で一時間は出来立ての感触が味わえるというとんでも技術是非コツチの世界でもファーストフード各店に実装してもらいたいな。

そう考えながらあつという間にライブ会場へ到着。

ひよひよいと潜入成功。

一々S・M・Sの隊証提示やアポの確認なんぞやってられっか。

無駄に能力を駆使してシエリルの位置を掴む。

と、一緒に彼の息遣い。

「あれ？アルト居るじゃん……。
うわ、気まず。どうせイチャイチャしてるんだろっしなあ……。
でも折角並んでまで鯛焼き買ったんだから、渡したら退場するか」
さくさく歩いて地下の水槽状になっている所の階段前に到着。
何やら声が複数聞こえる。
おかしいな、四、五人の人の気配。
それで妙に動揺を感じる。
頭を切り替える。
足音を消し、気配を消し、ギリギリまで迫る。

「……よ」

「本当なのか!？」

「本当よ……だから、フロンティアはもっと酷い所だって思った」

「そんな……」

アルトとシェリル、それにオズマの声。
ん？なんでオズマが居るんだ？

「ッ、軍の上級仕官宛の機密情報よ……」

あれ？聞いたことの無い声だな。

「ギヤラクシーのSOS信号は悪質なサボタージュとみなし、これを無視せよ……」

「バカなッ!」

oh……、何やら凄い緊迫な瞬間に来ちまった。
とはいえ、SOSを無視せよか。
あの時感じた『性質の悪い何か』はココの上か？
いや、違う。ココの上じゃない。
もっと、大きな何かだ。

「わかったでしょ？貴方達フロンティアは銀河条約違反を犯してまでも、同胞を見捨てるって」

「そんな……」

グレイスさん、声色違います。

シエリルを連れて帰った時の優しい声じゃありません。
なんか怖いです。

「グレイス、ギャラクシーの被害状況は！」

「既に護衛艦の三分の一を失い、メインランドがやられるのも時間の問題って……」

「ッ！どうして今まで黙ってー！」

「仕方ないでしょう……ギャラクシーは遠くて手も足も出せない。
私達は新統合軍でも、プライベート・アーミーでもないですからね」

三分の一が壊滅と考えていいか。
不味い状況だな。

今すぐに行っても間に合うかギリギリだな。
そう思っていると、シエリルの怒声が飛ぶ。

「S・M・Sの戦闘ミッションは、一回幾ら？」

「なに？」

「答えて!!」

「アンタ達だってギャラクシーが正しいか、
フロンティア政府の言ってることが正しいか確かめてみたことはないの!!」

ほう。

雇おうってのか、俺達S・M・Sを。

「フツ、おもしろい。」

銀河の妖精は戦いの女神にもなる、ってか」

「オズマ駄目、畏かもしれない」

「……一億と二千万クレジット。

マクロス・クォーターと艦載兵器一式の使用料だ。

あとはオプション兵器の使用毎に加算される」

「フ、いい額ね。

ブラックカードよ、足りなきゃ次のアルバムの印税を注ぎ込んだっていいわ」

「ま、こっちも命が掛かっているんでね」

「命……」

何よ、あんたもプロでしょ。なんか文句ある？」

「いや、俺だって誰かを守りたくてS・M・Sに入ったんだ。だがまさか……お前の金で飛ぶとは思わなかったけどな」

おーおー、強がっちゃまって。

だが、その覚悟は受け取った。

ならば応えて見せよう。

「ミッションが終わったら、返しに来なさい。

……勿論、無傷でね」

「シエリル……!!」

いいねいいねえ。青春だね。

しかしこう二回も世界移動したり元の世界に戻ったり……
こういう場面はいいね。

譲れない覚悟と決意、確固たる意思を感じる。

それに何より、命の輝きを見ることが出来る。

PPPPPPPP「え？」

「「「「「え？」「「「「「

おっと、空気が凍った。

とりあえず携帯を操作し音を消す。

「誰だ！手を上げてゆっくり出て来い!!」

なんつーバレ方。

もっと颯爽と登場する算段が……。

とはいえ鯛焼き持つてるからなあ……掲げていくか。
そんな訳で両手で鯛焼きを頭上に掲げながら階段を上がる。

「「「「「は？」「」「」」」」

そりゃそうだろ、鯛焼きがいきなり出てきたんだから。

「こんにちは、皆さん」

「「「ゼノン！？」「」」

「ども」

軽く挨拶。

正直この空気は壊したくはなかったがしょうがない。

「ちょっと、どうしてココにいるのよー！」

「シエリル、お前に差し入れをと思ってな。

コイツを買ってきた」

ポンポンと鯛焼きの入っている容器を叩く。

「それって、もしかして数量限定の超銀河鯛焼きのBig Ver.
！？」

「そのとおり〜」

「ウン、食べてみたかったのよ〜これ！ありがとうー！」

キヤイキヤイ喜んでいるシェリルを横目にオズマに近づく。

「てな訳です」

「まったく……タイミングが良いんだか悪いんだか……」

「今回は良い方で」

「はあ……」

オズマは仕方が無いと自分に言い聞かせ、眉間の皺を寄せながら軽く溜息。

サツとシェリルに向き合い、言った。

「シェリル・ノーム、交渉は成立。艦長の許可が出た。」

「しょ、正気なの!？」

だから軍の民営化なんて……」

となりで新統合軍の服を着た美人さんがそう言うも、オズマは無視してアルトとゼノンに向き合う。

「アルト准尉、ゼノン少尉!

現時刻をもって我々S・M・Sは、ギャラクシー船団、避難民船の救出作戦を発動する!

ミッシヨン・コード、銀河の妖精!」

スクランブル。

今頃S・M・Sでは急ピッチで出撃準備中だろう。

「ゼノンくん？」

「あ、グレイスさん。どうも」

「さっきの登場は思わず笑いそうになっちゃったわ」

ニッコリと笑いながら言うグレイスにゼノンは軽いジャブを放たれた気分になった。

「言わないでくださいよ。」

俺だってまさかあんな場面に遭遇するなんて思いもしなかったんですから」

「そうね、私なら去ってるわね」

「そこは若さゆえのなんとかですよ」

「あら、私だってまだ若くてよ？」

「そうは言ってないじゃないですか」

「そう？」

笑顔なのにプレッシャーを感じます。グレイス姉さん。

「そうですね、全然問題無いですよグレイスさんだったら」

「ふふ、嬉しいこと言ってくれるわね」

「んじゃま、そろそろ行かせて貰いますよ」

そう、何時までも話してはられない。
作戦開始まで一時間を切っているのだから。

「……ギャラクシーを頼んだわ」

信じているという強い眼差しを受けたゼノン。
そう言うグレイスに、ゼノンは答える。

「ええ」

そう言うや否や、一気にその場を後にした。

.....

漆黒の宇宙に光りの円が回る。

中心から戦艦、マクロス・クォーターが出現。

「船体各部に異常無し、デフォールド成功です」

「本艦前方02にギャラクシー難民船団の反応を確認、望遠映像出します」

映し出されたその光景に、思わず声が出る。
戦闘の光り。

黒い宇宙で異質に光る赤い光り。
チカチカと点滅する爆発の光り。

「敵バジユラ側には、巡洋艦クラスの戦闘艦も存在するもよう」

息を飲む音が嫌に響く。

その中でも、艦長の声は雄雄しく響く。

「モニカ君、敵部隊の空間配置を確認、

ラムは通信回線を開いて難民船団にこれから援護すると通達、
ミーナ君は、全デストロイド部隊に対空迎撃配置を！」

「了解！」

艦長の命令に、場は更に引き締まる。

とここで艦長が無理を通して搭乗したキャシーに声をかける。

「キャシー君」

「は、はい！」

「我々S・M・Sの戦法は、軍と違い少々ワイルドだ。
覚悟は……いいかね？」

向けられたその眼光は鋭く彼女を射抜く。

「ッ！……臨む、ところです！！」

そう言い放った彼女の顔に迷いは無かった。

「うむ」

それを見て、ワイルダー艦長は満足そうに頷いた。
そして、

「全艦、戦闘準備！！」

その掛け声が、全クルーに響く。

.....

格納庫には、オズマの音が響く。

「今回の重きは救出だ。

一匹たりとも避難船に近づけるなッ！！

そして貴様らッ！！

いいか、避難船だけじゃなく貴様らも必ず生きて帰ってこいッ！！！！
これは命令だッ！！」

「「「「「了解！！！！」」」」」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

そして、

「アタシの歌を聞けえ!!!」

戦いの火蓋は切って落とされた。

出撃（後書き）

次回は全編戦闘になる筈！！！！

俺の技量でハイスピードバトルができるのか……！！？
出来る限りは頑張ります！！

そして一週間以内に上げてみせるッ！！！！
多分。

アドバイス、感想等お待ちしております。

ではまた。

激戦（前書き）

一週間じゃ駄目だった……。

申し訳ない、見えませんが土下座しています。

と、いうわけで一部ラストパートに！

どうぞ。

激戦

スカル小隊は既に発艦、各部隊も続けて戦闘区域に向かって光りの尾を残す。

昇降機兼カタパルトによって格納庫から上がってきたのはF91。

「カタパルトスタンバイOKです。
発進のタイミング、ゼノンさんに預けます」

ラムからの通信が入る。

モニターに映し出された顔は戦闘時らしい、緊迫した顔つき。
しかし、その声には恐怖による僅かな振るえが見え隠れしている。

「F91、了解」

ゼノンも今回のミッションの過酷さを思うと体に力が入る。
拳を握り直した瞬間、一度消えた筈のラムからの通信モニターが再度眼前に映る。

「ゼノンさん……無事に、帰ってきて下さい」

ラムはゼノンにそう呟いた。

「ああ、勿論だ」

ゼノンも笑顔で答える。

一瞬、硬くなつてないだろうかと心配だったが、
ラムもゼノンに伝えるように笑顔で返してくれたので杞憂に終わる。

そして今度こそ、モニターは消える。
目に映るのは、赤く光る戦闘の輝き。
軽い深呼吸をし、ゼノンは言う。

「F91ガンダム。ゼノン・グレイブ、行きます！」

加速。

白き機体は漆黒の宇宙を駆ける。
青い粒子の尾を引きながら。

.....

「はじまってる……」

夜の中。

部屋の窓の先に映る色とりどりに光る海上ステージを見つめ、ラン
カ・リーは呟いた。

その光りはシェリル・ノームによるフロンティア最後のライブ。
チケットは、有る。しかし、行けない。

オズマから自宅謹慎を命じられた身であり、外出は出来ない。
その時にオズマからシェリルはスパイではないかと言われた。
正直、信じられないと思った。

自分の憧れの人が、尊敬する人がそんな真似する筈がない。
それは彼女に対する信頼であり、同時に、いつか越えてみせる壁と
して。

ランカ・リーは思った。

だから、お兄ちゃんゴメンなさい。と心で呟いた。
身支度を整え、チケットをしっかりと握り締め、彼女は走り出した。
極彩に彩るステージに向かい。

「流石に多いッ!！」

初めての戦闘時以上に湧いて出るが如く迫るバジユラに対し、ゼノンは叫んだ。

加速。

右のビーム・ライフルと左のビーム・ランチャーを別方向へ向け、トリガー。

僅かに遅らせ、右背部のヴェスバーを稼動し正面に向けて放つ。

同時に左背部のヴェスバーはそのまま下方へ発射。

再び飛び交うビームを縦横無尽に避けながらさらに加速。

「シィッ!！」

MVDの刃を右足の土踏まずより出現させ、蹴りを脳天から叩き込む。

そのままスラスターを噴かせサマーソルト、一気に斬り裂く。

それを好機にと赤いビームの雨がゼノンのF91を襲う。

「見える」

だがゼノンは避ける。

そこに来るのが分かっているから。

スラスターなど使わず、AMBACのみで。

「そこッ！」

そのまま回転し、ビーム・ライフルを発射。

遅れて苦しみの渦が襲う。

「くう……」

人々の苦しみ、バジユラの苦しみ。

それを感じ取る。

「クソッ！！何故だ！何故お前達は人間を襲うんだ！！」

迫るバジユラに聞こえる筈のない声を荒げる。

「苦しみが分かるのに！！理解できているのに！！なんでなんだよッ！！！！」

そう叫びながら、吼えながら。

ゼノンは苦しみの渦に飛び込んでいった。

一つ。

二つ。

三つ。

また、命が散ってゆく。

その表情は怒りと苦しみと、そして悲しみで満ちていた。

そこで通信が繋がる。

『全機に通達、避難船はまもなく戦闘宙域よりフォールド安全圏に入ります』

よし!!

と、思うのも束の間。ゼノンの感覚が走る。

「狙われている!?

……アレかッ!!」

見据える先、そこには紫色の巨大なバジユラの戦艦。

護衛のように随行している周りの艦から察するに、恐らくアレは旗艦。

「やらせんツ!!」

最大加速。

群がるバジユラを物ともせず、一気に突っ切る。

「ツク!?ランチャーにッ!!」

雨のように降り注ぐ敵の弾幕を驚異的な操縦と勘で回避し、

バジユラ群を突っ切るも左に持っているビーム・ランチャーに被弾してしまう。

即座に手放し、速度は緩めずに大型艦の射線上、避難船を守るように躍り出る。

「ゼノン!?何を!!」

「ゼノンさん!?!」

レーダーで見た隊の面々はゼノンの狂行に思わず声を上げた。

「ッ！敵艦に高エネルギー反応！！！」

「F91！！何をやってる！早く射線上から退避するんだ！！！」

オペレーターからの報告を聞き、オズマから怒声が飛ぶ。

他のクルー達はゼノンは死ぬつもりではないかと、呆気にとられている。

だが、通信機能を前面OFFにしたゼノンにその通信は聞こえていない。

こうなることは簡易に予想できているので、予め切っておいたのだ。

「来る……」

感覚が告げる。

そして僅かに遅れて、敵艦の砲頭から極太の三つのビームが放たれる。

「ガンダムッ！！！」

だがゼノンは迷わず、恐れずに叫ぶ。

「お前の力を見せてみる！！！」

ゼノンの呼びかけにF91は応えるように、その双眼を青に光らせる。

バイオセンサーとサイコフレームにより感覚は拡大し、F91はその力の一部を解放する。

力の振動。

F91からはオーラのようなものが発生し、右手に持ち替えたビーム・サーベルが唸りを上げる。
その刃が 粒子の奔流と共にビーム・サーベルが一気に巨大な剣となる。
それを、

「ウウオオオオオツッ！！！！！！」

眼前まで迫っていたビームへ振り下ろした。

巨大なエネルギー同士の衝突による凄まじい光と衝撃が襲った。

「なんだ、アレは……」

「F91にはあんな機能がついていたのか……？」

その場に居るほぼ全員がそう思っただろう。

あんな巨大な戦艦のビームを防げる機体が在るのだろうか、と。全員が思考の海に沈む中、いち早く立ち直ったのは艦長だった。

「ッ！！避難船のフォールド状況はどうかね！？」

「は、はい！三隻の内一隻は既に突入、残り二隻です！」

「保つのか……ゼノン君……！！」

傍から見れば、その均衡はすぐに崩れそうに見えた。
防いでいるF91の倍はあろう光りの奔流。
それをたった一本の剣で防いでいるなど。

「くっくっく……！！押し、負ける！？」

右手が震える。

巨大化したビーム・サーベルがじょじょに戻されていく。

「クソッ！まだだ、まだ引くわけには……！！」

後ろには未だフォールドに入っていない二隻の避難船がいる。出し惜しみはしてられない。

「最大、稼d……！！」

最大稼動のリミッターを解除しようとしたその瞬間、放たれたビームをF91の巨大化したビーム・サーベル防いだ。だが、ゼノンの感覚が警告を告げていた。すると、再び旗艦から僅かに遅れて二射目が放たれた。

「なんだと!？」

即座に左手に持っているビーム・ライフルを手放し、ビーム・サーベルに持ちかえる。

粒子の奔流、二本の青い光りの剣が宇宙に舞う。刃を交差させ、二射目に向かい再び振り下ろすが、

「ぐおッ!?!しまッ……」

バジユラ大型からの攻撃がF91を襲う。

その所為で刃が止まってしまう。

砲撃と避難船に意識が反れていたから気がつけなかった。だが、このままでは終わらん。

「なん、とおおおッ！！！」

捻りをAMBACとスラスターを噴かして最大限早く行い、その場で独楽のように高速回転。

ビーム・サーベルでバジユラ大型を両断しながら砲撃にブチ当てるが、この僅かな遅れが判断のミスだった。

迫り来る三つのビームに対し、防げたのは一つと半。

防げずに通り過ぎた一つは避難船に直撃し、爆炎に包まれてしまった。

軌道をずらすだけに止まってしまったもう一つは避難船のブリッジ付近に被弾。

「クソがあッ！！！」

流れ込む意思の塊。

絶望、恐怖、悲壮感、安心、色んな感情が混じったモノが感覚を刺激する。

一瞬の暗転。

「うっ……」

ゼノンが意識を失いかけてしまう。

同時に、F91も機能を停止してしまった。

「く……どうした、F91」

今ので相当な無茶をしたのは自覚している。

UG細胞があるとはいえ、やりすぎたか？と思った。

それも一瞬だった。

起動音と共にモニターはじょじょに回復していき、状態をチェックする。

外部及び内部装甲の修復完了。

同時に剛性をさらに強化完了。

各駆動系統の修復、改修完了。

各エネルギー変換効率をさらに上昇。

e t c …… e t c ……

「ハハツ、どうやらもつと無茶しても大丈夫なようだな」

その呟きに応えるように、F91はその眼を光らせた。
と、ここで通信が繋がる。

「F91!!ゼノン、無事か!？」

「大丈夫です、隊長。始末書だったら後で書くんでは今は!」

「……いい覚悟だ。ついでに色々と話してもらおうぞ」

「考えておきます!」

通信を終えると、ゼノンは旗艦の撃沈に向かいF91を向かわせた。

その際、横目で避難船の様子を見る。

轟沈した一隻の残骸が宇宙に漂っているのが見えた。

それを見たゼノンの表情は今にも泣きそうだった。

そして入れ替わるように、その顔が苦渋に歪んだ。

そして、ギリツと歯軋りがコックピット内に虚しく響いた。

- - - - -

「ん？攻撃が止む！？」

感覚が走る。

数秒の間があり、バジユラ達は攻撃を止めて突然と静止した。おかしい。バジユラ達の雰囲気ガラリと変わった。そう、突然全バジユラが同じ方向を向き静止したのだ。

「なんだ……？歌？シエリルに……もう一人はランカ、か？……まさか！？」

脳裏に走った予感。

下手をしなくてもコレは最悪の流れになりうる。そう思考している間に、バジユラ旗艦が歌に攻めるように発光しだす。

突然の沈黙にマクロス・クォーターのブリッジも騒然と状況確認に追われていた。

「いきなり、なんなんだ？」

「バジユラ全部隊、攻撃停止！」

「ッ！バジユラがフォールドします！！！」

「フォールド！？」

「まさか！ギャラクシーの難民船を追うつもりじゃあ！？」

そう言っている間にバジユラ達はフォールドに入ってしまった。
ジェフリー艦長はこの事態に頭をフルに回転させ、指示を出す。

「……………全艦、緊急フォールド！」

戦闘部隊を直ちに回収、バジユラを追うぞ！！」

そう叫ぶ艦長の言葉に、クルー全員の緊張が跳ね上がる。

そう、戦場は移ろうとしている。

フロンティアに。

「F91よりクォーターへ。」

本機は一足先にフロンティアに行っています、では」

ゼノンはいいながらF91を身近のバジユラ艦に取り付いた。
そのままゼノンとF91はフォールドの渦に飲まれていった。

「ゼノン！？」

「なんて無茶を……………」

その眩きは虚しく響く。

事態は加速する。

戦場はフロンティアへ。

激戦（後書き）

最近、滅法涼しくなりましたね。

少し肌寒いほどに。

皆様、風邪には気をつけてください。

次回、激戦 其の二 多分。

歌の力（前書き）

こんにちは、お久しぶりです皆様。
お待たせしました。

更新ですッ!!!

どうぞ。

歌の力

不思議な感覚だ。

フロンティアに向かうバジユラ艦にしがみつきいた状態でフォールドの中、ゼノンはそう思った。

先ほどフロンティアからココに来るので一回、今現在で二回目なのだがやはり不思議だ。

良くも無ければ悪くも無い。

本当に不思議な、言葉では言い表せない。

そう思うのも束の間、光りの渦が唐突に終わる。

目の前には再び、漆黒の宇宙が広がり、眼下にはフロンティア船団が映る。

「早い……」

見えた光景に思わず呟く。

自分が掴まっていた艦より早く来ていた別のバジユラ艦からの攻撃により、

フロンティアの街は所々から火の手が上がっている。

遅れて、人々の声が感覚を走る。

「く……」

悲痛な声に、顔が苦しみに歪む。

それと同時に一瞬の思考。

バジユラの狙い。恐らく”歌”の歌い手。

シエリルとランカだろうと結論。

何より彼女達の歌を感じたのだ。間違いは無い。

「行くぞ、F91！」

機体をメインランドに向け一気に加速、
掴まっていた戦艦に貫通力を調整し高めたヴェスバーとビームライフルをありつたけ食らわせ、撃沈。

僅かに遅れて迫り来る赤い雨を掻い潜り、その超絶な感覚を用いてバジユラを撃墜していく。

そしてメインランドに入ると同時に主砲をチャージしているバトルフロンティアの姿が見えた。

「あの旗艦を狙うつもりか……いけるのか？」

主砲のチャージが完了し、バトルフロンティアの艦首が敵旗艦に向いた。

通信に射程エリア内の友軍の退避命令が下る。

そしてそこから数秒、主砲が発射された。

「……駄目だな」

エネルギーの奔流が貫く中、ゼノンが呟いた。

そして着弾、漆黒の宇宙に爆発の光りが広がる。さながら、太陽の如く。

だが、アレは違う。

感覚が告げる。

見つめる先、煙の中から現れたのは、バリアフィールドを纏った無傷の旗艦の姿。

「……」

アレを撃沈させるのはちと骨が折れるな……。

だが、可能な筈だ。俺と、ガンダムなら。だが今は……！
そう思考する中、ゼノンはアルト、シェリル、ランカの元へと急いだ。

急な話だが、大体の物語には必ず主人公とヒロインと敵が出てくるものだ。

そしてココはマクロスの世界。

そう考えると自然に主人公はアルト。ヒロインはシェリルとランカになる。

そして出来るのはマクロスのテーマの一つ、三角関係。それはいい。

問題は、歌だ。ご存知の通り、この世界の歌は凄まじい力を持っている。

リン・ミンメイ然り、熱気バサラ然り。

異種との対話の役割を大きく担っている。むしろ歌無しでは成し遂げる事など出来ないだろう。

そこで歌の歌い手が重要となってくる。即ち、シェリルとランカである。

もしゼノンの思考の通りこの二人がFの歌い手ということならば、死なせる訳にはいかない。

ゼノンの経験上、自分というイレギュラーの存在がどう影響するかが気かりなのだ。

U・Cの時は出てこない筈の機体が出てきたり、本来死ぬ筈の人が死ななかつたりなど、

自身の尽力により自分の知る歴史とは離れた歴史を作ったのだ。

無論、単なる自己満足に過ぎない。死なせたくないという思いがその結果なのだ。

幸か不幸か自身もNTとして覚醒し、感覚を知った。

真の意味で、優しさを理解し、思い、想った。

故に、言い方は可笑しいかもしれないが、

本来死んでいってしまう者達は死なすべきではないと思った。だから

からこそ戦った。
故に彼等を死なせる訳にはいかない。
無論、彼等を正しく導く者達も。

- - - - -

「海上ステージ……アレは、ランカちゃん!?
囷になるつもりか!? 無茶だッ!」

感覚に響く、荒い息遣い、弱弱しくも確固たる覚悟。
見えたのは光り。

ランカ・リーは自分のことをバジユラが狙っていると気づいた。
そして、これ以上被害を増やさぬ為、己を囷としたのだ。

しかしその覚悟も虚しく、螻蛄のような外見のバジユラに追い詰められてしまう。

「クッ……近すぎる」

ビームライフルを構えるも、ランカとバジユラの距離が近すぎて撃てない。

確かに今撃てばあの螻蛄バジユラは倒せるだろう。だが……撃てばランカは死ぬ。

そうしている間にランカは螻蛄バジユラに捕らえられてしまう。
そしてその巨体に似合わないスピードで離脱していった。

「デカイくせに早いじゃないかよ……」

悪態を吐いている最中にも、蠅螂のバジユラは遠ざかってゆくも、アルトのメサイアがそれを追う。

「いけるのか、アルト……」。

ならば俺は少々銀河の妖精さんのお守りでもしてますかね」

アルトなら大丈夫だろう、と妙な確信を信じゼノンはシエリルの前に陣取った。

「よう、妖精さん！相変わらず美しいな」

「ゼノン！？こんな時の何言ってるのよ！」

左腕のビームシールドを展開させシエリルを守るように構え、右腕のビームライフルでバジユラを墜としていく。

「なに、お前の騎士がちよいと席を外してるみたいなんだ。代役だ」

「なっ！？違うわよ！アルトはそんなんじゃない……私は……私……は……」

そう口籠るり戸惑いを見せるシエリルを尻目に、ゼノンは若いな。と思った。

同時に敵意を感じ、視線を前に向け感覚を全方位に走らせる。

「素直じゃねえな、……まあいいさ」

そう言いながらビームライフルを正面に僅かにずらしつつ三発。

斜め上に二発撃ち、バジユラを撃墜させる。

知覚外の上、狂い無く発射されたビームにバジユラ達は成す術も無く墜ちていった。

だが……

「ッ！？アルトっ！！」

「なにッ！？」

突然のシエリルの叫びに、思わず声が出る。

シエリルを見ると後方の空を見ている。視線を移すと空から黒煙を上げて墜ちているメサイアの姿。

被弾したのか！？

だがあの程度ではメサイアは落ちない筈だ、ならば気絶でもしているのか？

どうする？

この場を任せられる援軍がない以上ココを離れるのはシエリルを危険に曝すことに他ならない。

どうすれば……ッ！！

「シエリルッ！！」

「ゼノン！？」

ゼノンは叫んだ。

この状況を打破する最高の策を持って。

それをシエリルに伝える為に。

「歌え！」

「で、でも私の歌は……」

バジュラに効かないとでも言おうと思ったのだろうか。それとも力などないと言おうと口籠ったのだろうか。何を馬鹿な。

「大丈夫だ、シエリル。お前の歌には確固たる力がある。お前の歌は絶対に届く、だから安心しろ」

「……」

「……それともなにか？ 今までのお前を否定する気か？」

その言葉を聞き、うな垂れていたシエリルの顔が勢い良く上がる。

「……ゼノン」

「なんだよ」

「私は、シエリル・ノームよ」

「だから？」

背を向けていたシエリルはゼノンの、F91に向き直る。

「私を守りなさい」

「……」

「届かせてみせるわ、私の歌で。」

だから……」

「……」

「全力で私を守りなさいっ！！」

その言葉を聞き、ゼノンは口の端を上げる。

「戻ったな、シエリル。」

ツハ！いいだろう、全力で守ってやるよ、銀河の妖精ツ！！」

そう言うとシエリルも笑みを見せ、羽織っていたマントを脱ぎ捨てる。

「聞き惚れなさい、ゼノン。」

なんせ私を守りながら歌を聴けるんだからね」

そう言い終えると同時に、シエリルは走り出した。

僅かに遅れて、彼女の歌声が響く。

「~~~~」

走る。

船の形をした海に浮くライブステージ。

真反対に彼女は走る。騎士の生還を願って、歌を届ける為に。

「これで起きなきゃ男じゃねえぜ、アルト」

F91をシエリルの移動と同時に守るようにホバリングで移動させる。

程なくして反対側のステージに到着。

一気に感覚が刺激される。

シェリルらしい感覚の波。

心が熱くなるような……けど、どこか安心できるような、そんな感覚が。

「奴らも気づいたみたいだな……」

離れようとしていたバジユラの感覚が引き返してくるのを感じる。

遅れて、ステージに灯りが再び輝いた。

モニターも復活し、フロンティア全体にシェリルの姿が映し出された。

「これは……なるほど、グレイスさんか。良い仕事してるな、流石シェリルのマネージャー」

F91のカメラアイを僅かにズームさせ、観客席上部でスタジオマネージャーを叱咤したのだろう、

凄まじい勢いで機器を操作している妙に希望に満ちたおっさん共が見える。

「……いいね、こりゃ負ける気はしないな」

シェリルの歌によって沈んでいた空気が上がって、熱気を帯びていくのを感じる。

歌に勇気づけられたのだろう、感覚で分かる。

同時に、アルトの力強い鼓動を感じ、ゼノンはやっと起きたかと思いを漏らす。

「あの紫の機体……」

『こちらアンタレス1よりS・M・Sのパイロットへ、貴官を援護する!』』

どこからか現れた紫のバルキリー、味方と考えていい……のか？
視界の端にアルトのメサイアが蠍螂のバジユラに向かっていくのが
見る。

「ん?……やっとか」

向かってくるバジユラを迎撃しようと、ビームライフルの銃口を向
けた瞬間、

そのバジユラは上からの攻撃でこちらが撃つ前に爆散した。

遅れて灰色の重装備バルキリー、アーマード装備のメサイア・オズ
マ機が降り立った。

「隊長、ちょっと遅かったんじゃないですか?」

「お前らが無茶すぎるんだよ!だが助かった。

……疲れただろう、帰艦するか?」

「ッハ、冗談」

「なら一気に片付けるぞッ!」

喋りながらロックオンをしたのだろう、全ミサイルハッチを開き一
斉に発射した。

遅れてフロンティア上部ではデストロイ・モンスターが敵艦に向か
い砲撃、撃沈させていた。

炎の花が咲く。

『こちらクォーター！敵旗艦にダイダロスアタックを仕掛ける！』

「おおう、マジかこりゃ見ないと」

と同時に上空ではアルトが螭螂バジユラ相手に板野サーカス中。

ミサイルを避けきり、螭螂バジユラに組み付く。

同時に、ミシエルの焦りを感じた。

視界の先にはビルの上の看板の間という絶好のスナイプポイントから移動し、

橋の上をいう至極目立つ所に躍り出る青いメサイア・ミシエル機の姿が。

スナイパーであるミシエルがわざわざ目立つ場所に姿を曝してまで位置をずらしたお蔭か、

アルトのメサイアと組み付いている螭螂バジユラの腕を見事狙撃した。

続けて腹、頭部と寸分狂わず打ち抜き、螭螂バジユラを撃破した。

「流石、良い腕だ。

……だが迂闊だぞ、この戦場で安心するのはまだ早い」

そう呟きながらミシエルに背後から忍び寄ったバジユラ大型をビームライフルで撃ち抜く。

「わ、悪いゼノン、助かった」

「まだ気を抜くなよ、ミシエル。気を引き締めろ」

反応できたから良いものを、もし知覚外だったら確実にやられていた距離だ。

僅かに遅れてクランからも怒声と心配の気持ちでイツパイの叫び声が聞こえた。

「ミシエルっ！無茶をし過ぎだ、この馬鹿っ！！」

「悪い、クラン。……大丈夫だ」

そんなこんなで視線を移すとクォーターが最速で前進しながら旗艦に向かう。

無論、そう易々と相手も接近させるかと主砲をクォーターに向かい発射。

しかしそこはオカマのボビヤン。驚異的な操舵で変形しながらバレルロールで回避。

しかも速度を緩めること無く潜り抜け、側面にいた通常艦を踏み台にし、背後をとった。

A M B A Cで体を捻り、スラスターを全開で噴かし、ピンポイントバリアを集中させた左腕を振り上げ、

敵旗艦に向かい一気に突き出した。

遅れて、突き刺した少し先から内部からひび割れのように赤い光が走り、爆発

クォーターは全身をバリアに包み、全速力で離脱。

バリア発生機関を破壊したのか、敵旗艦の周りを覆っていたフォールドバリアは消失した。

このチャンスを逃す筈も無く、バトルフロンティアによる再びのマクロスキャノンでの砲撃。

敵旗艦はマクロスキャノンに貫かれ、回りの通常艦を巻き込み大爆発を起こした。

「おお〜……」

あの大きさの戦艦の爆発。

まさに太陽ができたような明るさである。宇宙の暗さがそれを引き立てる。

次いで、感情の波がゼノンを襲う。

「……………」

撤退していくバジュラからの痛み、怒り、そして悲しみ。

やはり個々に感情はある。だが何か違う、やはり人とは違うからだろうか。

でも分かり合える筈だ。

それには原因を探らなければいけないのだが……………これといって検討がついていないのが現実。

歌に反応しているのは見れば分かる。

なぜシェリルとランカに反応しているのかが最大の疑問だ。

やはり彼女達の歌から感じた波、波長のような不思議な感覚……………あれが解決の鍵なんだろうか。

- - - - -

そう思考の海に沈んでいると、クォーターのジェフリー艦長から負傷者救助の通達。

向かいたいのは山々だが、ここの面子は少々お疲れ気味。

なので疲れが取れ次第、向かうと通信をする。

オズマ機は正面の、アルト機は左、紫のバルキリーは右とシェリルとランカを囲うように、

ステージからほんの少し離れた浮き島にガウオークで機体を着陸させた。
ちなみにゼノンのF91は浮いたまま、ハッチをオープンして身を乗り出す最中。

アルトはアンタレス1、紫のバルキリーの操縦者に礼を直接ハッチから出てお互い顔を合わせて言った。

「S・M・S所属、アルト・早乙女准尉より、アンタレス1へ。
貴官の援護に感謝する」

パイロットもメットを脱ぎ、アルトに言った。

「ッフ、当然のことをしたまで……」

「……ッハ!？」

フロンティアに雪が舞う。

「うわぁ、雪だっ」

「綺麗……」

歌姫二人は戦いが終わった安堵からか、その顔は笑顔だ。

「吊いの雪……」

オズマはそう呟いた。

聞こえていたの者は、この場には誰も居ない。

「……終わった、のか？」

バトルフロンティアも定位置に戻り、S・M・Sと軍は救助作業中。一般人達は重力制御等、色々な問題があり、まだ出てきてはいないがそれも時間の問題だろう。

その中でゼノンの気は張ったままであった。

NTとしての感覚が告げている。

それに神経を研ぎ澄ます。

「ゼノン、降りて来いよ」

「ゼノンく〜ん」

「ゼノン、降りてらっしゃ〜い」

下でアルト、ランカ、シェリルが呼んでいるがそれどころではない。ゼノンはF91のコックピットハッチから身を乗り出したまま、後方を向いていた。

下では聞こえなかったと思ったのだろう、三人の呼び声が強まった。そんな中、感覚は確信を告げる。

明確な敵意を。

「……まだ、来る」

そう呟くと同時にゼノンは再度コックピットに乗り込み、F91と再び一体となる。

ツインアイが光りその場で急速転回、スラスタから粒子を噴出させ、一気に加速。

凄まじい速度で真反対へと向かっていった。

「なにッ!？」

オズマはゼノンのいきなりの行動に嫌なモノを感じた。
ゼノン自身には無く、ゼノンが行動したというこの事態に対して
そしていままで培ってきた自身の戦士としての勘に。

「ゼノン！どうしたッ！！」

「まだ来ますッ！真反対……手薄なところに。
！！……来た」

フォールドの渦、その数は5。

先ほどの艦隊と比べればかなり少ないが、一際大きい渦が見えた。
そこから出現したのは先ほどと同型の巨大戦艦。

それに追従する形で4の通常艦。

出現より僅かに速く、生体反応を確認したうえで外壁をビームサー
ベルで斬り裂き、

宙域に出ていたゼノンは敵艦を確認するや否や敵艦に向かいF91
を加速にかけた。

「クッ、すぐに行くッ！！無茶はするなよ、ゼノンッ！！
アルト！さっさと機体に取り込めッ！！別働隊だッ！！！！」

通信はそこで切れた。

ゼノンは迫り来る小型と大型バジユラを墜としながら驚異的な速さ
で通常艦2隻を破壊しかけていた。

「墜ちろッ！！」

艦全体を高速で駆け巡りながらビームサーベルでメッタ斬りに裂い
た後、

連続でビームライフルとヴェスバーによる一斉射撃をお見舞いする。早速一隻轟沈、続いて二隻目も同じ方法で難なく沈める。

「援護が来るまでは時間が掛かりそうだな。

それに俺だけでは流石にフロンティアに向かったバジユラまでは手が出せん。

頼んだぞ、アルトにオズマ隊長」

そして見据える先、紫色をした大型の巨大戦艦の姿。

目に見えるほどのフォールドバリアを纏いフロンティアに向け進行中。

「今度は俺が墜とさせてもらうぞ、覚悟しろよッ!!」

そう叫び、ゼノンの駆るF91は青い粒子を噴かしながら敵艦に向かっていった。

歌の力（後書き）

さて、次の更新は明日と言ったのですが……
読み返してみているいたらどうも気に入らず、再び書き直し中です。
申し訳ない。

ですので、次話更新は一週間後に変更させて頂きます。

アドバイス、感想等待着っています。

次回 『ガンダムの力』 ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400r/>

マクロスF Formula

2012年1月11日06時54分発行